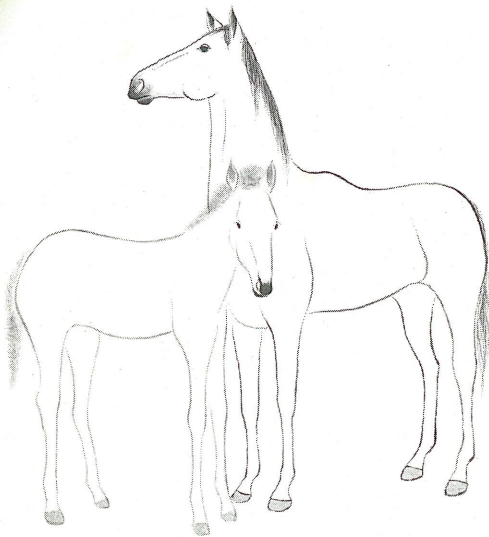


# 幼児の教育

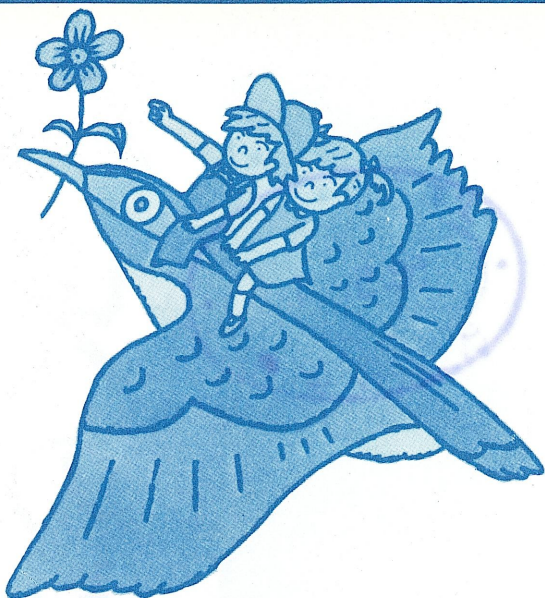
第八十卷第六号

日本幼稚園協会

家庭・保育所・幼稚園



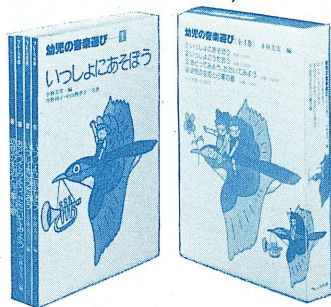
6



## 《全4巻》小林美実/編

- ① いっしょにあそぼう
- ② いっしょにうたおう
- ③ おどってみよう、たたいてみよう
- ④ 幼児の生活と行事の歌

セット定価=5,300円



# 幼児の音楽遊び



### ① いっしょにあそぼう

小林美実編・丹野禧子・中山勢津子共著  
B5判 120頁 定価1,200円 千250円

子どもはうたったり、踊ったりすることが大好きです。それは音楽すること自体が遊びになっているからです。本書には「手遊び、指遊び」「ジェスチャー」「えかき歌」などの他、乳児向けの曲も加え、「遊び方」を例示。



### ② いっしょにうたおう

小林美実編 神山種子著  
B5判 136頁 定価1,300円 千250円

この曲集は「愉快に」「リズムカルに」「おどけて」「力いっぱい」「おいかげ歌」など8項目にわけてあります。これは曲の特徴と、受け入れる側の子どもの気持の両面を考慮したためです。教材として最適。



### ③ おどってみよう、たたいてみよう

小林美実編・著  
B5判 160頁 定価1,500円 千250円

子どもは楽しい音楽をきいたり、うたったりする時、必ず手足や体を動かします。本書では、子どもの自己表現の最も基本的な方法の体の動きである踊ったり、打楽器をたたいたりする機会がもてるよう構成している。



### ④ 幼児の生活と行事の歌

小林美実編・著  
B5判 136頁 定価1,300円 千250円

幼稚園、保育所における一年間の流れの中から、行事に題材をとる一方、「しつけ」「あいさつ」「食事の歌」なども盛りこんでいる。「遊び方」発展例」を加え、保育に十二分に生かせるよう構成している。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781代にお問い合わせください。

**フレーベル館**



幼児の教育

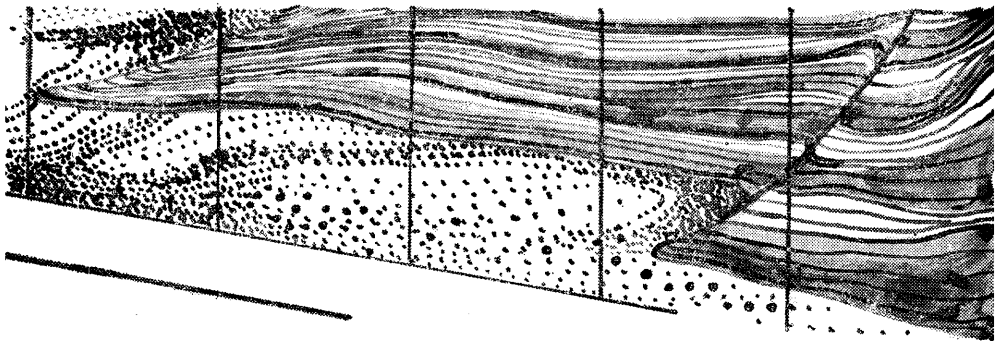
第八十卷 第六号

# 幼児の教育 目次

——第八十卷 六月号——

© 1981  
日本幼稚園協会

- |                         |                |
|-------------------------|----------------|
| 幼稚園からの見なおしを……………        | 永野重史……………(4)   |
| 一枚の写真(その2)……………         |                |
| ——メタ・テキストとしての——……………    | 本田和子……………(6)   |
| 歴史人口学からみた生と死 六……………     | 鬼頭 宏……………(14)  |
| エリクソンと幼児教育(1)……………      | 仁科弥生……………(21)  |
| 私の保育……………               | 野口智恵子……………(28) |
| 続・保育の中の小さなこと大切なこと⑦…………… | 守永英子……………(34)  |
| 遊びと子どもの発達⑩……………         |                |
| ——描画のあそび(その三)——……………    | 加古里子……………(36)  |



子どもとの出会いの中で学ぶこと②……………水沼 昭子…(40)

『復刻・幼児の教育』並びに懸賞論文募集のお知らせ……………(42)

永井荷風『狐』を読む……………前田 愛…(44)

史料紹介

『邦訳 日葡辞書』

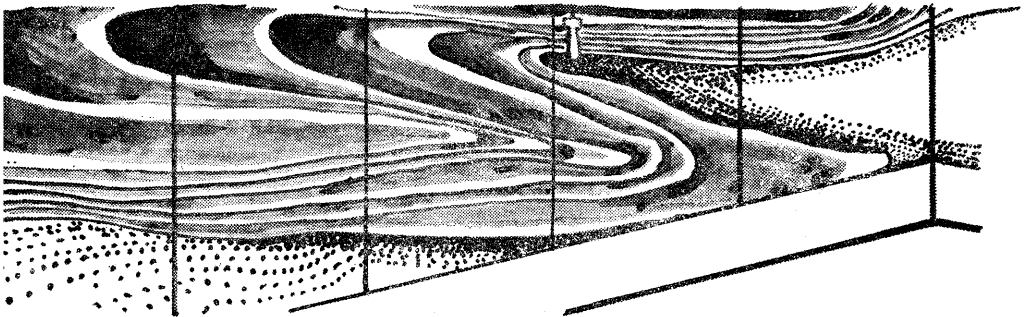
——わが国中世の児童文化史研究によせて……………(59)

表紙・中村 宗弘 表紙題字・比田井和子 カット・福田 理恵

編集委員 外山滋比古・村田 修子

本田 和子・田中都慈子

編集主任 津守 真・皆川美恵子



## 幼稚園からの見なおしを

永野重史

直接にたしかめたことはないのだが、スキナーというアメリカの心理学者が、つぎのような趣旨のことを言っているそうである。

どのような立派な彫塑であっても、作者がそれを製作する過程を映画にとつて、あとから、フィルムのひとつまひとつまを調べてみると、ひとにぎりの粘土をべたんと張りつけたり、へらでわずかな動作の積み重ねの結果、最後に立派な作品ができあがるのがわかる。立派な彫塑がいちどにできあがるわけではない

のだ。

ここで、スキナーは話を教育のことに移す。教育によって人間をつくりあげる場合にも、同じように、少しずつつくりあげることをしなければならぬ。何かができる人間をいちどにつくりあげてしまおうとするから失敗するのだ。少しずつ変えてゆけばうまくゆくのだ。

このように考えて、スキナーは、例のプログラム学習を開発するわけだが、プログラム学習など知らない人でも、右のような考え方に賛成する人は少なくないのではないだろうか。

別のたとえで言うならば、学力の、れんが積みである。基礎学力れんがからはじめて、順に学力れんがを積みあげようというのである。

こういう見方をする人は、学力れんがをどのくらいの高さに積みあげたかという角度からしか教育を見ようとしぬい。

幼稚園教育にも、基礎学力のれんが積みしか期待しない。なにしろ、早くから学力れんがを積みはじめるところに幼児教育のよさがあると考えるだけなのだ。こういう教育観に欠けているのは、子どもがおのずから育つという事実についての認識であり、子どもの自発的な学習意欲についての配慮である。

授業についてゆけない子どもがいると、理解できないことをいねいに教えてやりさえすればよいと考えて、彼が学ぶ意欲を失っていることを考慮しよう

はしない。テストの成績だけが頭にあって、子どもの心を忘れているのである。

ところで、ここ十年ぐらゐの間に、一部の心理学者によって学習意欲の研究がおこなわれてきたが、彼らに言わせると、学習到達度だけを考えた教育は、どうしてもうまくはゆかないだろうという。と言うのは、いくら教師が努力したとしても、教育の結果（学業成績）ばかり重視しているかぎりは、人にくらべて成績のよくない者は挫折感を抱かざるを得ない。挫折が繰り返されれば、学ぼうという意欲はいつかは無くなる。教師のどのような工夫も受けつけなくなるのである。

では、どのようにすればよいのか。教育の結果よりも、学ぶ過程を重視するように頭を切りかえなければならぬ。へたでもよい。歌っていることを大

切にする。誤字があってもよい。ものを書いたということを大切にす。そのようにして、学力の平等よりは、学習意欲の平等が実現するようにする。学習意欲さえ残っていれば、いつかは学ぶはずである。

また、彼らは、その場かぎりの、当座の学習意欲と、長続きする学習意欲を区別する。「よくできたらほうびをあげよう」というような約束は、当座の学習意欲をたかめるのには役立つが、自発的な興味を失わせてしまう。ほうびをやるという約束によって、万事が頼まれ仕事になってしまふのである。

頼まれ仕事として勉強している中学生たちが、自分でものごとを解決しようとするよりは、自分の生活を支配しているかのように感じられるおとなたちに対して攻撃的になる例は、近頃の新聞に毎日

のっている。また、頼まれ仕事としての勉強をなんとかやりこなした生徒が、大学入試に合格したあと、どのくらい勉強の意欲を失っているか。日本の大学生の不勉強は、世界的に有名なようである。

学力ではなしに学習意欲に焦点をあてて教育を見直してみると、こういうことになるのだが、こうしてみると、とくに新しい主張はないようにも思われる。子どもの生活、子どもの遊びを何よりも重んじた、幼稚園教育の先輩たちの頭にあつたことを今様に言い直してみただけのよいうな気もするのだが、いずれにしても、小・中・高の教育、何とかならないものだろうか。幼稚園教育の独自性など言っていないで、むしろ、幼稚園教育者から、小学校から先の教育についての積極的な提言をしてもよいのではないだろうか。

（国立教育研究所）

# 一枚の写真 (その2)

——メタ・テキストとしての——

## 本田和子

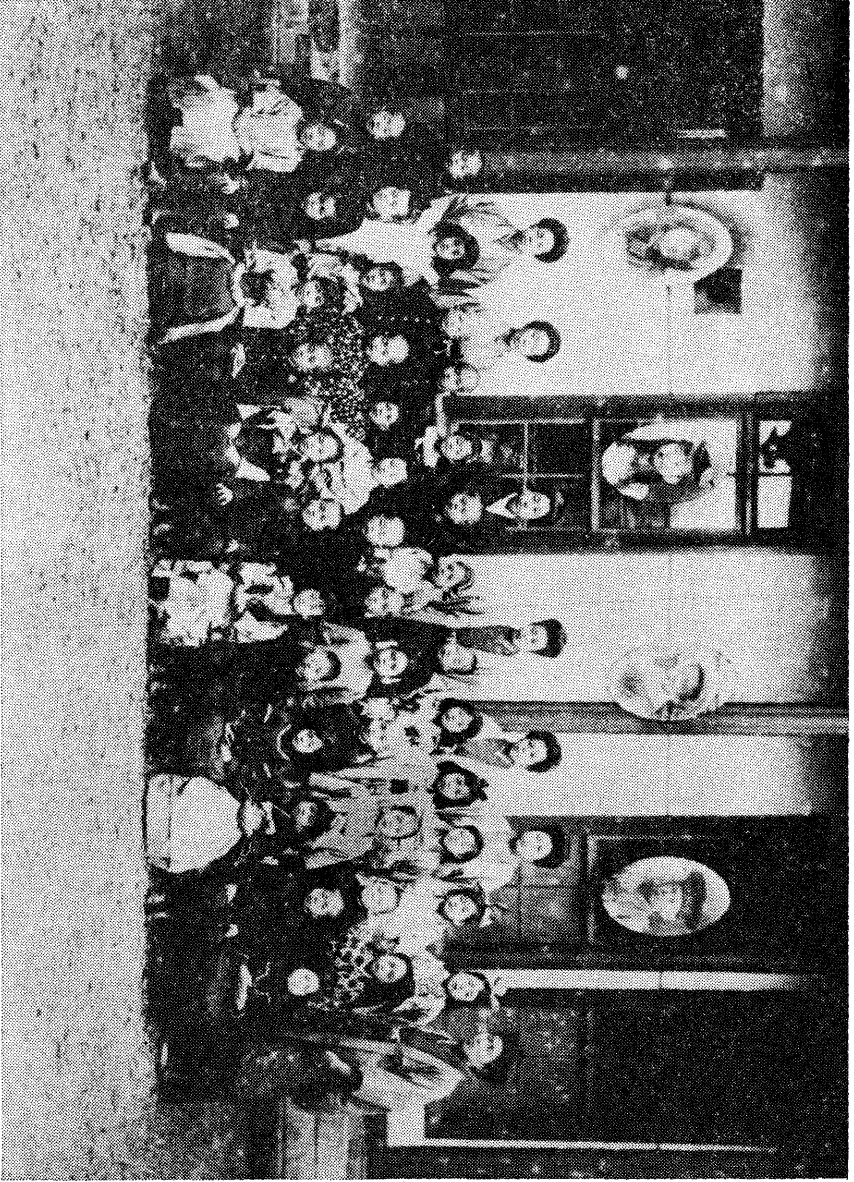
幼い日を記念する一枚の写真は、その人にとって、過去という薄霞の中にしほしの旅を可能にする、開かれた窓である。然し、同時に、それは、単なる個人の生育史の一齣であることを超えて、子どもに託された「人々のまなざし」を指し示し、「時代の想い」の証人となる。たかだか、何平方糧の空間の中に、子どもらの衣服、家具や敷物、或いは背景に選ばれた建築物などの形で、その時代が凝縮され、子らへの想いが呼吸づいているのだ。

私は、先に、明治十五年のお茶の水幼稚園の記念写真を手掛かりにして、当時の園児たちを支えた生の文脈を読み解くことを

試みた。<sup>\*1</sup> すなわち、コロニアルスタイルの園舎が近代を象徴し、附属幼稚園もまた、文明開化のモニュメントの意味になったこと、にもかかわらず、素朴で土くさい子どもらの表情が物語るのは、山の手上流の子女たる彼らの生活が、未だ都市化の洗礼を受けず、地方武士の習俗を伝えるかのような、鄙びたものであったらしいこと、などを……。

時代は、三十年を経過する。前回も、比較対照の資料として掲載したが、写真(2)は、大正二年の卒業式風景である。この一枚の写真は、私どもに、何を語りかけてくれるだろうか。





▲ 写真 (2)

## ◆ 詰衿服の男児たち

先ず、目に著しいのは、勢揃いした男児たちの学童服姿である。十八名中、三名を除くだけで、全員が丸坊主の黒の詰衿服である。女兒の洋服姿が、数名に過ぎないのに比すとき、これは明きらかに、読み解きを必要とする一つの「徴」ではないか。

ところで、服装史が描き出すのは、日清、日露の兩戦役後、学帽、紺緋筒袖の小中学生男児スタイルが定着すること、或いは、第一次大戦後に、男児の洋服が漸増すること、などである。例えば、明治三十一年二月十六日の「都の華」は、「都下にて小学校へ通ふ程の年頃なる子供即ち十歳より十四歳ぐらゐまでの服装を見るに学校へ往くと往かざるとに拘はらず男児は筒袖が大流行にて筒袖着ざるは何となく芸人の子供らしく不活潑に見えて友達仲間にも勢力なきやうなり」と、当時の子ども風俗を伝える。一方、大正十年一月十四日の「読売新聞」は、「子供服の需要は近頃めつきりと殖へて、四十二年頃子供服を試みに売り出した時は、月に、五、六着位の注文で、実用品とならずに居たのが、昨年冬の冬など、日に、四、五千円宛子供服で売り上げがある」という記事を載せている。

いずれも、幼児服に関する言及ではないが、それにしても、写

真(2)は、この二つの記事のほぼ中間に位置すると見てよい。そして、附属幼稚園児の戸外遊びを撮影した大正五年の写真は、男児ともに和装であり、子どもの日常着としては、未だ、和服が主流であったことを裏付けている。僅かに、欧化を象徴するのは、真白で大ぶりの洋風エプロンであるか。洋風エプロンは、明治後期から、婦人雑誌などに、しきりに紹介され、たつぷりとよせられたギャザーやフリルによって、必ずしも実用とのみは言い難い、その性格をあらわにしている。

こう見てくると、勢揃いした学童服姿は、やはり、卒業式と結びついた特別の、とりわけ、男の子たちと関係の深い「徴」とみなすべきであろう。先ず考えられるのは、幼稚園の退園が、みんな一緒に卒園するという形の学校暦として定着し、しかも、それが、「卒業式」という「儀礼的な時間」として結晶化したこと、特に、それが、男児たちにとっては、一種のイニシエーションとして機能したと言うことである。

教育施設への出入りが、同一年齢に限られ、ある一日を定め一斉に行なわれる。そして、それ以外には、自由な入退学が認められない。こんな閉鎖的な学校暦が確立され、子どもたちの生活を拘束するようになったのは、わが国の場合は、近代義務教育以降の出来事であろう。

幕藩体制下の藩費や寺子屋の入退学は、年齢も時期も、大凡、それぞれの個人に即していた。藩費の入学年齢は、七、八歳以上であれば別に制限はなく、時には五歳の者が混っていたと言う。退学は、二十歳前後が多かったが、藩によっては、現職中は必ず在学するという方針を採ったから、四十歳すぎても塾生として勉学を続ける者もあったらしい。個人学習たる素読から講義を経て、集団学習たる会説、輪講へと、学習の順序が定められていたため、一人々々、ばらばらに入学してきても、格別の支障は生じなかった。

寺子屋は、八、九歳で寺入りして、ほぼ五年でいとど在籍して教授を受けるのが一般であったと言う。ただし、それぞれの子どもの入学が、その子どもと家族の事情によって決定されたとしても、それが、成長の一つの節として重要視されたことは確かからしく、赤飯を炊いて師家に納め、もよりの天満宮に詣でるなど、「寺入り」にまつわる様々な儀礼が、それを証している。

こうして、その進退が個人と家族の側に属していた初等教育が、国家的規模により、一斉に庶民の子弟をからめとる形で展開されたのが、近代義務教育の施行であった。そして、その規則は、より幼い子どもたちをも拘束する。すなわち、一斉に小学校へ入るためには、一斉に幼稚園を出ていかねばならないのだ。

写真に見られる男児の詰衿服姿は、現実的には、小学校の校服の先取りであろう。と同時に、それは、いまここに顔を並べている男児たちが、そのまま一斉に小学校へ進学するという人生コースが、疑う余地もない自明の理として大人たちの意識を支配していることの証である。それはまた、幼稚園卒業即小学校入学という進路が、あらがい難く子どもらを呪縛していることを物語る。学制頒布後、約四十年の間に、全員就学、とりわけ、男児皆学の経路が、かくも徹底的に国民感情を統制した「徴」を、ここに読むことが出来よう。因みに、明治十五年（写真(1)の時期）には、五十パーセントに満たなかった就学率が、大正期に入ると、九十パーセントに達している。

### ◆ 除去されたヴェランダ

背景に選ばれた園舎には、例の手すりが見られない。これは、創設当初の園舎が、明治十七年九月の暴風雨によって破損し、十九年三月以降、再築された新園舎が使用されたことによる。新園舎は、総坪数は前園舎とほぼ同じであったものの、様式は、「コの字型片廊下」の和洋折衷形式となり、ヴェランダをめぐらしたコロシアムスタイルは、早々に退けられた。以後、この

園舎が、大正十二年まで、使用されることになる。

教育の近代化を象徴する附属園舎が、僅か十年の耐用年数しか持ち得ず、改築を余儀なくされたとは、建築史的に見て、興味ある出来事に相違ない。

開化の記号であり、国家なるものを見る形で内外に喧伝すべく、十八万の国費と外交関係者たちの情熱が注がれたとされる鹿鳴館建築もまた、明治二十七年の地震で大損な被害を蒙り、全面的な補修を余儀なくされている。十六年の竣工後、十年余の出来事であった。しかも、それ以前から、階上の舞踏室がグラ／＼ゆらくと言う、利用者たちの不安の声があったとのことだ。<sup>4</sup>

とすれば、当時「欧風建築の粹」と見られたそれらは、その実、極めて脆弱な、日本の風土にふさわしからぬものだったのであるうか。鹿鳴館建設に当っては、設計者コンドルと、外務卿井上馨との間で、しば／＼見解の相違があり、結果として、様々な様式も加わって、コンドルを苦悩させたと伝えられている。<sup>5</sup> 附属園舎に関しても、「見るからに西洋風に」と望む為政者の思わく

と、工法その他で未だ不足をかこつ建築施行者との間に、密やかな葛藤を想像するとしても、強ち、不当とのみは言えまい。いづれにせよ、秋の台風で屋根は飛ばされ、使用に堪えないほどの損害を蒙ったのであった。

そして、再築された新園舎は、もう、手すりやヴェランダを必要としてはいいない。その頃までに、工部大学校講堂、築地訓練院、上野帝室博物館などと、欧風建築も漸増し、さらに、十六年には、先に触れたように、華麗な開化の記号たる鹿鳴館も竣工している。幼稚園舎になわれていた開化の尖兵たる役割は消えて、慎ましく、本来の目的が呼び戻されたと言ふことだろうか。

ところで、前園舎のヴェランダは、日本家屋の縁側にも似て、子どもたちにとっては、恐らく、遊び場であったに相違ない。然し、管理者や教師の側から見れば、内と外の境界に位置する吹きさらしのこの空間は、部屋とも通路とも分類し難く、取り扱いはくい厄介な場所であったろう。従って、改築時に除去されたいきさつを通して、大人たちの管理意識が、子どもの遊び空間を追究していく姿を読むことも可能である。いづれにせよ、こうして作り上げられた附属園舎は、昭和戦前期まで、幼稚園建築の典型とみなされ、<sup>6</sup> 全国の範とされたのであった。

### ◆都市の子ども、子どもの都市

大正二年の写真は、子どもたちの相貌の変化を浮き彫りにする。はっきりした造作、中心部に向かってきりっと集中した目鼻

だが、彼らの表情を、大人びた恰利なものに見せる。明治十五年の写真に見られたあの鄙びた面ざしは、どこを探しても見出せない。

この三十年間、東京の都市化への歩みは目覚ましかった。園児たちの生活の拠点たる本郷湯島周辺も、例外ではない。一つの指標として、木造家屋の増加状態を例にとろう。本郷区の場合、明治十九年に四、〇〇五戸、同二十八年に一一、六三八戸、大正四年には二〇、〇二五戸と増加の一途をたどる。小石川区は、十九年五、六六二戸、二十八年九、三四四戸、そして大正四年は二〇、九三三戸である。四谷、牛込など、園児たちの通園圏と考えられる各区の場合も、ほぼ同様の傾向が見出される。他方、日本橋、京橋、神田などの家屋増は、明治中期或いは末期にはピークに達し、以後漸減の傾向を示す。これは、これら地域が商業地のため、大会社や大商店が出現して、住居などの小家が整理されていく過程である。これと対比して、山の手地区の小家屋の増加は、住宅地の開発と、給料生活者の急増に見合う出来事なのだ。従って、山の手人種たる附属幼稚園児の生活の周囲には、日々住宅が建設され、人口が増加していく都会が、呼吸づいていたのである。

子どもらの生活を変えたのは、人口の密度だけではない。東京の夜は、明治末期から大正にかけて、急速度で明かるさを増し

た。東京電燈会社の設立認可は、明治十六年であるが、当時の燈火は、ランプへの依存度が高い。例えば、東京市内の街燈基数を対照すると、明治三十三年の数字で、ランプ五六三九一、ガス一八七、電燈は僅かに二六一に過ぎない。開化の象徴たるガス街燈すら、容易にランプ街燈を凌駕し得ないのだ。然し、興味深いのは、各家庭の場合、引用戸数では、ガスにも及ばない電燈が、引用燈数においては、はやくとガスを追い越していることである。明治三十八年の資料では、ガス燈は一戸あたり四燈でいどであるのに、電燈は、既に八燈に達していた。そして、明治四十五年には、ガス燈と電燈の引用戸数そのものが逆転する。四十年十二月に駒橋発電所が竣功し、遠距離送電が可能になったことも、恐らく、電燈の普及に拍車をかけたに相違ない。

電燈は、ランプのように、給油やホヤ磨きの手間もかからず、ガス燈のように点火の手数も不要である。しかも、家中のあちこち、先の資料によれば八箇所にも設置することが出来、すみ／＼まで明かるくしてくれる。これは、夜のイメージを大幅に変え、人々の、もちろん子どもをも含めて、時間意識を変貌させる出来事であった。

かつて、子どもたちは、夕闇が迫り、ものの形がおぼろになると、遊びを止めて家に入り、魂を奪い取る漆黒の闇を恐れなが

ら、母たちにすがりついて夜を眠った。顔は見えぬながらも、同じ寢具の中に手を伸ばせば届く母や乳母、それを身体で確かめつつ、彼らの暗い夜は、安らかに経過したのである。

然し、簡便な燈火の普及は、子どもらを大人の、夜の時間を隔てた。母たちは、かつては寢所にこもることが自然であった夜の時間を、昼の営みの延長として用い始め、子どもらを寢所に送りこむことで燈火の輝く夜を、己れらの時間として徴づけたのだ。

子どもたちに、不安な一人寝を強いたのは、単に、西欧育児思想の影響だけではあるまい。家々の夜が明かるくなるとき、子どもらの夜は、不安と孤独に変貌したと言うなら、余りにも逆説にすぎらうか。

交通機関の発達も、子どもらの近辺を騒がせた。明治三十六年から、東京電車鉄道、東京市街鉄道の両社によって、半ば競争のような形で開発の急がれていた市街電車が、三十七年一月には、園児たちの極く身近に、網の目を広げてくる。昌平橋―本郷三丁目間の本郷線の開通がそれである。四十四年、東京市の買収により、市営電気軌道が開業されるが、その頃、一日の平均乗客数は、六十万に及ぼうとしていた。<sup>10</sup>

四十三年三月二十三日の「二六新聞」は、「どの車輛も悉く満員にして起点に近き停留場にて乗客する者は、幸に乗り得ると雖

も、中途の停留所にて乗らんとする者は死物狂となるにあらずんば大概は乗車し得ず」と報じて、今日の通勤ラッシュと同様の光景を記録している。

もちろん、園児たちが、こんなラッシュ時に、市電を利用したなどと言うつもりはない。然し、こうして、めまぐるしく変貌する、しかも殺伐な生活のたたずまいの中で、彼らの感性が過度に刺激され、神経質で早熟な育ち方が促進されたとは、充分に肯定し得ることであろう。さらに言うなら、木材や土器に代って、生活の中に進出してくるガラスやアルミニウム、砂糖の消費増や嗜好品の普及など、子どもの感性に影響したであろう消費財の変動は、枚挙にいとまがないほどなのだ。都市化と共に、大衆の中に位置を占めた様々な「ものたち」は、すべて、子どもたちを刺激し、いわゆる神経の細かな「都会っ子らしさ」を作り上げるべく機能したと言えよう。

近代都市なるものが、生産に直結しない人口を大量に抱えこみ、巨大な消費空間を膨張させる一面を持つとするなら、その消費性と、それゆえの不安定性を、真向から引き受ける存在が子どもなのではないか。一枚の写真が示す表情の変化は、私どもの前に、「子どもにとって、都市とは何であるのか」を、如実に物語る視覚記号なのである。

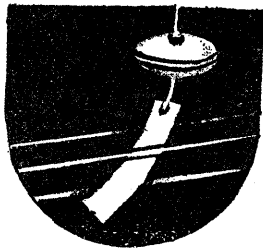
\* 1 「一枚の写真」(本田和子「幼児の教育」80・4、昭56・4)

\* 2 「近代日本服装史」(昭和女子大学被服学研究室、昭51)

\* 3、6 「幼稚園施設のあゆみ」(菅野誠「幼児の教育」79・9、昭55・9)

\* 4、5 「鹿鳴館貴婦人考」(近藤富枝、講談社、昭55)

\* 7、8、9、10 「明治文化史12生活篇」(渋沢敬三編、原書房、昭54)



# 歴史人口学からみた生と死 六



鬼頭 宏

## 五、出産と子の成育（承前）

(五)

江戸時代の夫婦が多産であった、というよりそうでなければならなかったのは、どうしてなのか。それには三つの理由が考えられる。

まず消極的な理由として、避妊の知識と確かな技術がなかった

ために、妊娠を有効にかつ安全に制限できなかったことがあげられる。

次いで少なくとも後継ぎの男子を持つこと、できればなるべく多くの子を持つことが望ましいという、現代とは全く異なる価値観が支配していたことである。子孫が絶えることを惧れる古くからの感情、家の継承を重んじる風潮、そして老いた親の扶養や一族の生活安定のために多産が必要とされた。

しかしこのようなことからは、かならずしも多産でなければ満たされないわけではない。江戸時代の平均余命をみたときに示唆



したように、生後間もなく死んでしまいう子が多く、成年に達する子が少ない、生存が不確実な社会だったことから、家を継ぎ、次代を担う者を得るために多くの子を産んで危険を避ける必要があったのである。

今回は、人生の初期に起る生命の損失がどのようなかたちで、どのくらいの頻度であったかを見ることにしよう。史料の性質上、(f)出生以前の死亡(死産)、(g)宗門改帳に登録されるまでの乳児死亡、(h)宗門改帳登録後発生する数え年二歳以後の幼児死亡に分けて、出生児の成育過程を観察する。

(二)

乳児死亡率は社会・経済の近代化をはかる重要な尺度であるが、現在、わが国の乳児死亡率は世界でもっとも低い水準であり、幼ない命の犠牲が少ない国のひとつになっている。しかしそれはほんの少し前に達成されたのであって、一九世紀まで溯れば、現代の発展途上国なみの高水準にあった。

江戸時代の死産と乳児死亡を示す例として、表5に一九世紀初期の陸奥国中石井村(現福島県)における出生児の経過を示してある。

ここでは二七一件の出産のうち死産と明記されていたのは二一

件で、死産率は出産千につき七八となる。経過不明の九件を加えると死産率は一〇〇パー・ミルを超えてしまう。飛騨の寺院過去帳から算出された数値も、多少の記録漏れがあるとされるにもかかわらず七一パー・ミルあり(須田一九七一より算出した一八〇―一九〇〇年の平均値)、出産一〇〇件のうち一件は死産という状態が、江戸時代後半の姿だったと思われる。

高い死産率の背景には、妊婦にとって厳しい労働環境、栄養の不足、母子衛生への無関心といった問題があるほかに、出生制限、すなわち間引きによる死亡も

表5 出産児の経過 (陸奥国中石井村, 1808~26年)

性別	出 産				乳児死亡	死 産 率	乳児死亡率
	出 生	死 産	不 明	合 計			
男	117	3	0	120	25	25	214
女	113	10	0	123	15	81	133
不 明	11	8	9	28	3	286	273
合 計	241	21	9	271	43	78	178

(1) (鬼頭 1976) による。

(2) 死産率は出産1,000につき、乳児死亡率は出生1,000についての件数。

表 6 生存期間別乳児死亡 (陸奥国中石井村, 1808~26年)

生存期間	乳児死亡	構成比	死亡確率
4 週 未 満	16	50%	89%
3 カ 月 未 満	9	25	49
6 カ 月 未 満	4	14	29
9 カ 月 未 満	2	7	15
1 年 未 満	1	4	8

- (1) (鬼頭 1976) による。
- (2) 期間不明の11件を除く。
- (3) 死亡確率は構成比にもとづく推計値。

隠されているにちがいない。

九カ月を胎内で過ごし、ようやく無事に出生したとしても、その後の安全な成育が保証されていたわけではない。満一歳を迎えるまでの人生の最初期には、さらに大きな難関が待ち構えていた。

中石井村の懐妊書上帳には出生千につき一七八の乳児死亡が記録されており(表5)、飛騨の過去帳によれば一

九世紀の乳児死亡率は二一八パー・ミルだった(須田一九七一より算出)。小集団の統計に

つきもののバラツキを考慮しても、出生児の二〇%以上は一歳未満で死亡していたことになり、乳児の生存がいかに困難だったかを、この数字が物語っている。

乳児死亡の態様についていくつかの角度からみてみよう。

まず、中石井村の記録から生存期間別に乳児死亡をとりあげたのが表6である。生存期間不明のうち八件は十一月と十二月に生まれた者で、年が明けてから日数が経って死亡したケースと考えられる。したがって月齢の若い死亡が強調されている傾向は否定できないが、出生後四週未満の死亡率がきわめて高く、生存期間が延びるにつれて生存の確率が高まっていくことが明らかである。このパターンは、死亡率の水準こそちがえ、現代にも共通している。

次に死亡の季節性はどうか。中石井村の場合、死亡月にははっきりとした季節性を認めることはできないけれど、春季(現行曆三~五月)出生児の死亡率が最も高く(二三三パー・ミル)、次いで冬季(十二~二月)出生児(一二二パー・ミル)だった。北関東の事例(鬼頭一九七三)では、死産と乳児死亡を含む死亡数は旧曆六・七月および十二~三月の二つの山があった。このように、ごく僅かな例からではあるが、一九世紀に乳児死亡は夏と冬に集中していたことが示唆される。

乳児死亡の季節性は、病気の性質、それを助長する生活環境、そして農業労働を中心とする生活のリズムによってもたらされたのだろう。

靄山政子（一九七二）は現在と二〇世紀初頭では「季節病カレンダー」が大きく相違することを明らかにしているが、乳児死亡についてみると、最近は十二月から三月にかけての冬季に集中が著しいのに対し、二〇世紀初頭には冬季とともに夏季の山が著しく大きかった。これは現在も八〇年前にも、乳児死亡原因として肺炎・気管支炎と下痢・腸炎が共通して重要だったが、現在ほどちかも冬季の疾病であるのに対し、八〇年前には下痢・腸炎が夏季のものだったという違いによっている。

江戸時代にも、非衛生的な水と食事は夏の下痢・腸炎を多発させ、粗末な衣服・栄養と不十分な暖房が冬の肺炎・気管支を助長したことは推測に難くない。

(七)

数え年二歳以上の幼児、小児の人口学的経過は宗門改帳の追跡調査によって、比較的容易に知ることができる。その一例として、木曾湯舟沢村で一七三一―六二年に生まれた子の人口学的経過を表7に掲げた。

表7 出生児の人口学的経過（信濃国湯舟沢村，1731～1762年出生者）

性別	出生児	死亡・他出(他出)		11歳時 在村者	結 婚		他出・死亡 11～30歳	31歳時 未婚者
		2～5歳	6～10歳		村 内	村 外		
男	163	28(2)	6(2)	129	87	4	30	8
女	133	14	8(3)	111	74	21	11	5
合計	296	42(2)	14(5)	240	161	25	41	13

表によると、二歳から五歳のあいだに二九六人のうち二人が他  
出し、四〇人が死亡している。したがってこの年齢層での死亡率  
は一四％にのぼる。六一―一〇歳の死亡率は急激に低下して四％、  
一一―一五歳では三％になる。

このように五歳以下の幼児死亡率がかなり高い現象は他の地域  
でも同様で、二〇％から二五％の死亡率はふつうに観察されてい  
る。宗門改帳に現われてこない乳児死亡を考慮すると、出生児の  
うち六歳を無事に迎えることができるのは十人のうち七人以下、  
一六歳までの生存率は六人以下ということになってしまふ。なん  
と大きな損失だろうか。

飛驒の過去帳は、一八世紀末から一九世紀なかばまでの十歳以  
下の小児の死亡原因として「虫」「痘虫」「驚風」などと呼ばれる  
小児病を多くあげている(須田一九七二)。それが具体的に今日の  
どのような病気をさすのかよくわからないが、それに加えて成人  
の死因として比重の大きい、痘瘡、痢病、傷寒、麻疹なども、単  
に「病氣」とされる中に含まれていたと考えられる。

死亡率の高低には育児に対する関心や熱意、あるいは経験によ  
る子の取扱ひ方の相違が反映していると考えられる。それは死亡  
率の男女差や出生順位による差を生んでいるだろうか。

中石井村の死亡率をみると男よりも女が高い(男二五、女八

一)。女児に対する間引の選択的実行があったのだろうか。しか  
し、性別不明の死産が多いことを考えると確かなことは言えな  
い。これに対し乳児死亡率では男の方が高くなっている。

二―五歳の幼児の死亡率は、これまで知られている諸地域では  
男女差はあまりないか、若干、女児の方が低いようである。湯舟  
沢村でも男一六％、女一一％で、女児の方が育てやすかったよう  
である。

出生順位および出産時の母親の年齢と死亡率の関係は複雑で、  
一般化することは難しい。乳児死亡率を中石井村の例でみると、  
出生順位とは関連が薄く、母親の年齢とは、四〇歳までは死亡率  
が低下する傾向があった。

五歳以下の幼児死亡率は出生順位がおそいほど、また母親の年  
齢が高くなるほど高くなる傾向があるように思われる。しかし、  
どこでも共通しているのは第一子、および一六―二〇歳の母親が  
産んだ子の死亡率が、明らかに他群よりも低かったことである  
(たとえば速水(一九八〇)による濃尾地方農村の例)。

出産とその生存が子にとって不確かであったように、母親にと  
っても出産は危険に満ちていた。飛驒の過去帳で二一―五〇歳の  
死因(男女合計)をみると、一二％を産後死および難産死が占め  
ている。女子に限れば、それは四分の一を上まわっていたことだ

表 8 出生と妻の死亡の関係 (信濃国湯舟沢村, 1701~50年結婚コーホート)

有配偶期間	出生なし	出生あり				合計
		出生と同年	出生1年後	出生2年以上	小計	
10年以内	6	7	4	2	13	19
11~20年	1	2	4	8	14	15
21年以上	1	1	0	20	21	22

(注) 妻の死亡によって結婚が終了した56例を対象とした。

ろう。

表 8 に湯舟沢村の妻の死亡と出産の関係を示しておいた。若い妻ほど、出生のあった年の死亡が多いことがわかる。有配偶期間が一年以内の場合、出生経験者の五四%が子の出生と同年に、三二%が翌年死んでいる。出産との関連が強く推測される例である。

平均余命を検討したときにも(第三回)、出産期間の女子死亡率が高いことを指摘しておいたが、このように妊娠や出産に伴なう危険が、多くの母の命を奪っていたのである。

(八)

最後に、なぜ江戸時代の夫婦が多産でなければならなかったのかという冒頭の問題を、人口再生産の面から解いてみよう。

表 7 から、人口維持をはかるのに必要な夫婦あたり出生数を計算すると次のようになる。男女こみで二九六人の出生児は、死亡または他出によって年々減少し、一歳時の残存者は二四〇人(出生児の八一%)だった。これは他の地域の五〇~六〇%と比べると条件が良いと言える。このうち一六一人が三〇歳までに村内で結婚した。この一六一人で同世代(二九六人)と同数の次世代を再生産しなければならないなら、一人あたり一・八四人の同性の子を持つ必要がある。したがって、夫婦あたりの出生数は(出生性比を親世代と同じだとすると)四・一四人となる。

一見したところ平均四人強の子どもを持つてばよいのだから、たいた問題はなさそうだが、実際にはかなりたいへんなことがあった。ことに女性にとって負担が大きかったと言わざるを得ない。

湯舟沢村の女性は平均二〇歳で結婚したが、年齢別出生率にしたがって出産していくと、四人の子を得るのに四〇歳近くまでかかってしまう。さらに出産期間の途中で死亡したり離別したまま再婚しない女性もいることを考えると、完結家族の出生数はもっと多くなければならず、したがって最終出産年齢も遅くならざる

をえない。

なお、この四人強の出生数は数え年二歳児の数なのだから、乳児死亡と死産を加えた実際の出産回数は六〜七回を下らないということも加えておこう。

このように女子の再生産可能年齢の大部分を費やして出産を続けなければならぬ社会では、出産力の大きさと死亡率の高さは、個々の家の継承にとって決定的な要因となってくる。武蔵国甲山村（鬼頭一九七八）や美濃国西条村（速水一九七三）で見られたように、出産率の格差はそのまま子孫の出生数にも差をもたらし、数世代のうちには上層農家では分家による世帯増加を、下層農家では絶家による減少を促すことになるのである。

（上智大学）

〔参考文献〕

速水融 一九七四 「人口学的指標における階層間の較差——濃州西条村の農民——」 徳川林政史研究所『研究紀要』昭和四十八年度。

速水融 一九八〇 「近世濃尾地方農民の人口学的観察——四六〇〇組の家族復元を通じて——」 徳川林政史研究所『研究紀要』昭和五十四年度。

鬼頭宏 一九七二 「懐妊書上帳にみる出産と死亡——幕末——

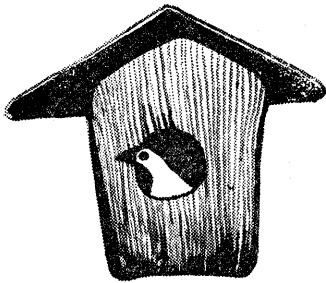
明治初頭の北関東における事例——」 『三田経済学研究』六号。

鬼頭宏 一九七六 「徳川時代農村の乳児死亡——懐妊書上帳の統計的研究——」 『三田学会雑誌』六九卷八号。

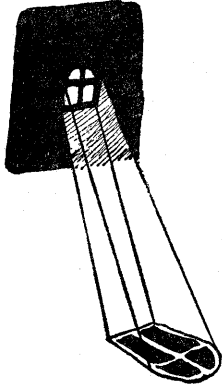
鬼頭宏 一九七八 「徳川時代農村の人口再生産構造——武蔵国甲山村・一七七七〜一八七一年——」 『三田学会雑誌』七一巻四号。

榎山政子 一九七一 「疾病と地域・季節」 大明堂。

須田圭三 一九七一 「過去帳を通じて観察した飛騨村落における徳川中期より現在に至る衛生統計について」 私家版。



# エリクソンと幼児教育 (1)



仁科 弥生

## 一、はじめに

今日のアメリカの幼児教育を支える理論の一つの柱はジャン・ピアジェの認知発達理論であり、もう一つの柱はエリック・ホーンブルガー・エリクソンの心理社会的発達理論であるといわれている。この心理社会的理論は、フロイトやアンナ・フロイトに学んだヨーロッパの分析医エリクソンがアメリカに移り住んで行なった精力的な児童精神分析の実践と洞察から生まれた理論である。私とエリクソンの最初の出会いは、今から二十数年前にさかのぼる。米国のアイオワ州立大学附属児童研究所で大学院生として学んでいた私は、幼児教育のセミナーで彼の名著『幼児期と社会』を読む機会を得た。彼の独創的な研究についてはすでにそれ以前から、児童の発達を研究する者の間できわめてユニークな理論として注目を引いていたが、一九五〇年に、それまでに公刊された彼の研究論文のいくつかが一冊にまとめられて、彼の最初の書『幼児期と社会』として出版されるに及んで大きな反響を呼んでいたのである。

「基本的信頼感」の獲得こそ人生最初期の発達の課題であると主張するエリクソンの理論は、母親の愛情をただ本能的なもの、

神秘的なものとして漠然ととらえていた私に、母親と乳児の日常  
的な触れ合いがどんな意味をもち、どんな作用を果たしているの  
かをはじめて教えてくれたといえる。また成人期の発達課題も提  
出されており、子どもを産み、育てることが女性の社会参加を阻  
害するものではけつしてないという指摘に、私は新しい一つの心  
理学的人生観を与えられた思いで、夢中で読んだものであった。

そのときの感動を今も忘れることはできない。三十年近く経過し  
た現在でも、彼の理論は、アメリカにおける精神医学や心理学の  
領域にとどまらず、幼児教育の分野においてもきわめて有効かつ  
具体的な方向を提示する理論として、教育実践の中にも大きな影  
響を与えつづけて今に至っている。

わが国でも、いくつかの彼の論文や著書が邦訳されており、彼  
の用語である「アイデンティティ」や「モラトリアムの心理」と  
いう言葉は人口に膾炙されている。彼の諸概念の有用性はわが国  
の精神医学の分野においても認められており、とくに、同一性の  
危機を青年期に位置づけたその理論は、現代青年の心理を説明す  
るものとして高く評価されている。だが、新しい視点から人間の  
幼児期をとらえ直したというエリクソン理論の重要な側面の評価  
は、今一つ十分でないように思われる。かといって、幼児教育の  
現場に直接かかわっていない私は、その理論を幼児教育との関連

で論じる具体的材料をもちあわせていない。そこで、ここではエ  
リクソンの心理社会的発達理論の原点を示す『幼児期と社会』を  
中心にして彼の理論を紹介しつつ、彼が幼児期の教育をどのよう  
に考えているのか、また今日われわれがかかえている幼児教育の  
諸問題の解決のためにどのような示唆を与えてくれるのかなど少  
し考えてみたいと思う。

## 二、漸成論的発達理論

エリクソンは、人間の成長と発達の過程をどのようにとらえて  
いるのだろうか。彼は、人間を身体的、精神的、社会的、歴史的  
存在というように多面的にとらえ、その統合の主体として自我の  
発達を重視している。そして、自我を、経験や活動を環境へ適応  
するための行動に統合していく積極的な能力であると位置づけて  
いる。さらに自我同一性アイデンティティという彼独特の概念を用いて、変化の  
中にありながらも内的連続性という感覚でとらえる人間の心理  
的基盤の形成の過程や、人が何らかの心理学的適応をなしとげ、  
それによって自己に対する感覚を高めていく過程を漸成論的発達  
理論として体系づけたのである。その理論は、生得的なリビドー  
の発現によって発達の方向と段階が決まるフロイトの心理学的発



達理論を、社会的、文化的視点を加えてさらに發展させたものともいわれている。なぜなら、フロイトの、リビドーが順次、器官を交えながら発現していくという發達段階説に、エリクソンはパーソナリティの發達が社会の歴史的、文化的基盤や対人関係の中で展開していくという点をも強調して、自我の機能や社会の作用を関連つけたからである。彼の理論が心理社会的發達理論と呼ばれる理由もそこにあるのである。

さて、エリクソンは人間の人生周期全体を問題にし、これに八つの段階を設けて理論を展開している。また、それを明確にするために「漸成的發達の図式」というものを用いている。漸成的發達の原理は一般化すると次のようになる。成長するものはすべて適切な速度と順序によって進む基礎計画をもっており、それぞれの部分は、一つの機能的な統一体を形づくる發生過程の中で、この基礎計画から、段階ごとに特殊な部分として發生し、またその部分はそれぞれの成長がとくに優勢になる時期を経過する。そして各段階は、前段階の上に發達し、さらにその後の段階すべてに何らかの影響を与えつつ統合されていくことを仮定する。たとえば胎児の發達のように、はじめは限られた器官しかもっていないものに諸器官が次々と發現して、一步一步成長していく。この發達の順序については、各器官はそれぞれ發生する時期があり、

この時間的因子はその器官の發生の場所と同じくらいに重要であるときみなされている。そしてその發生を時期を逸したり、その發達の初期において障害をうけると、その器官の發達は完全に抑制されるか、或は永久に歪められるという。またそれは同時に諸器官の機能的な統一全体を危険にさらすことにもなる。一方、正常な發達をすれば、結果として、身体諸器官の間にその大ききや働きからいって適切な関係が生まれるとされている。胎児は誕生の瞬間に、胎内における栄養物や酸素の化学的交換の場から、新生児として社会の訓練体系の中の母親の世話のもとへと移る。そして次第に増大していく彼の能力は、彼の属する文化が規定する可能性や制限に遭遇することになる。その様相は、一連の移動能力や知覚能力、社会的能力などがあらかじめ予定された發達順序に従って發現されていく過程であって、それは成熟していく個体が新しい器官を發達させることによるものではないのである。

すでにおわかりのように、この漸成論に従って、精神分析は、その個人特有の経験や内的葛藤がその人のパーソナリティの形成に及ぼす過程を体系づけたのである。そして健康な子どもは、一連のきわめて個人的な経験の中で、ある程度適切に指導されれば、發達の内的法則に従うという点で信頼できるということをフロイトは明らかにしたのである。それらの内的法則とは、胎児期にお

いては器官を一つずつ形づくり、今や子どもの世話をする周囲の人々と彼が意味のある相互作用を行なうための一連の能力を次々とつくりだす法則である。その相互作用の内容は文化によって大きく異なるとはいえ、その適切な速度と適切な順序とは依然としてあらゆる変異性を支配する決定的要因でありつづけると考えられている。そこには、子ども自身の生きる力をわれわれ大人がもっと真摯に信頼することの必要性が指摘されていると思う。

エリクソンは、このような漸成論的発達原理を用いて、発達モデルを記述している。そのおおよその筋道を述べると、まず、たとえば「取入れ」や「保持」など身体の器官様式が各発達段階特有の様式として発達して、それらがその時期の行動様式を支配する。次いでそれから器官様式が社会の育児様式によって影響を受け、その社会に特有の行動様式へと機能変化していくというものである。またその過程で自我の基礎が発達すると考えられている。そしてその理論は発達課題と心理社会的危機という構成概念に基づいている。すなわち、これは、大人の神経症的葛藤の内容は、すべての子どもが幼児期に経験しなければならない葛藤とそれほど異なっていないことや、すべての大人は、パーソナリティの奥深くにこれらの葛藤をもちつづけているというフロイトの発見をもとにして、各発達段階に特有な心理的葛藤とはどん

なものであるかを明らかにしようとしている。そして人間にとって、心理的に生きつづけるということは、ちょうどその身体的な衰えという脅威に対して休みなく戦わなければならないのと同じように、これらの葛藤を休みなく解決することであると考え、それら葛藤の克服を、それぞれの段階ごとに人が学習し、或は達成しなければならぬ発達課題であるとみなし、またそれらを「危機」と呼んで、人間の全生涯にわたって問題にしている。

それらの課題は、運動機能、知的能力、社会的能力、情緒的機能などの発達を基礎にして、人が環境を支配する力を増すにつれて達成されるものである。各段階におとずれる危機とは、人が社会の要請に自分を適応させることを迫られて経験する個人の内欲求と社会の要請との間の葛藤状態に他ならないのであるが、人はそれ以前に達成した発達の技能を駆使して、その危機を乗り越えなければならない。そしてそれを果たしたとき、次の段階へスムーズに進むことができるかと仮定している。また、このような経験を支配するその人独自の方法こそがその人の自我の統合機能なのである。したがって、各段階における発達課題と、その段階の心理社会的危機との間には相互関係があり、さらに各段階の危機の克服は、次の段階への準備となり、自我の強さとなる。つまり各段階は最初期から相互に関連をもっているという考えが示されて

漸 成 の 図 式

VIII MATURITY								EGO INTEGRITY VS. DESPAIR
VII ADULTHOOD							GENE-RATIVITY VS. STAGNATION	
VI YOUNG ADULTHOOD						INTIMACY VS. ISOLATION		
V PUBERTY AND ADOLESCENCE				IDENTITY VS. ROLE CONFUSION				
IV LATENCY				INDUSTRY VS. INFERIORITY				
III LOCOMOTOR-GENITAL			INITIATIVE VS. GUILT					
II MUSCULAR-ANAL		AUTONOMY VS. SHAME, DOUBT						
I ORAL SENSORY	BASIC TRUST VS. MISTRUST							
	1	2	3	4	5	6	7	8

VIII 円 熟 期							自我の統合 絶 望
VII 成 年 期						生 殖 性 停 滯	
VI 若い成年期						親 密 さ 孤 独	
V 思 春 期 と 青 年 期					同 一 性 对 役 割 混 乱		
IV 潜 在 期				勤 勉 对 劣 等 感			
III 移 動 性 器 期			自 発 性 对 罪 惡 感				
II 筋 肉 肛 門 期		自 律 对 恥 と 疑 惑					
I 口 唇 感 覚 期	基 本 的 信 頼 对 不 信						

いる。たとえば、乳児期の発達課題として母親との信頼関係の確立があげられているが、子どもがその後の人生において、人と暖かい人間関係を結ぶことができるかどうかは、ある程度この初期の信頼関係が確立されていたかどうかにかかっているというわけである。また、子どもは自分自身と両親の絆に確信をもつことによって、次の段階の課題である自律の獲得へと勇気づけられて進むことができるのである。その危機は「信頼対不信」、「自律対恥」と疑惑」というように対立的に示されているが、不信や恥という否定的な要素は、誰もが各段階での危機に直面し、それを解決しようとするときに経験するものであり、これをある程度経験することが強い自我の成長には欠かせないと考えられている。勿論、この場合、何が課題となるかは、それぞれの社会によって異なり、その解決のされ方も違うということが指摘されている。そこには、エリクソンの比較文化的手法による研究から生まれた洞察が反映されている。

漸成的図式の読み方についても少し説明してみよう。まず、図式は時間的な推移に伴う各部の分化の発展を定式化したもので、対角線部分に課題や危機が示されている。空白の部分は、発達の速さ、逸脱などに関して個人差の余地があることを示している。すなわち、各段階で、一つの核心的な葛藤が克服されて、新

しい自我の特質、つまり人間の積重ねられた強さの新しい規準が付加されるにしたがって、心理社会的発達は進んでいくのである。対角線の下空白部分はこれら葛藤の解決の一つ一つの前兆をなすものための余地であり、それらはすべて発達の発端から始まっていることを示している。たとえば自律の下の空白は、自律性のそれ以前の現われ方がどのようなかであったかを考察する余地である。対角線の上の空白は、たとえば自律性のその後の現われ方を示すというふうに、これら発達の過程で生じる派生的特質をはじめとして、成熟したパーソナリティにみられるさまざまな変形を明示するための余地である。この図式には、パーソナリティの発達が、単にリビドーの発現と充足のあり方によると考えるフロイトの心理学的発達理論の次元に、歴史的・社会的制約をはらむ現実の中でその発達が展開していくという心理社会的発達の次元を重ねたエリクソンの立場が明確に示されている。

このように、乳幼児期には乳幼児期にふさわしい発達課題があるのである。したがって、そのような課題にそって乳幼児期の教育のあり方が問われなければならないことはいうまでもないことであろう。

次回は、その発達段階の詳細をたどってみよう。

参考文献

- 1 Erikson, E.H., *Childhood and Society*. New York: W. W. Norton, 1963, 1st ed., 1950. (仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房一九七〇)
- 2 Erikson, E.H., "Identity and the Life Cycle: Selected Papers," *Psychol. Issues* (Monogr.), Vol. 1, No. 1, 1959. New York: International Universities Press. (小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房一九七三)
- 3 Erikson, E.H., *Insight and Responsibility*. New York: W. W. Norton, 1964. (鏑幹八郎訳『洞察と責任』誠信書房一九七三)
- 4 Evans, R.I. 『エリクソンとの対話』岡堂、中園訳 北星社一九七一
- 5 藤永保編『児童心理学』有斐閣 一九七三
- 6 Lorenz, K. 『文明化した人間の八つの大罪』日高、大羽訳 思索社一九七三
- 7 Newman, B.M., & Newman, P.R., 『生涯発達心理学』福富伊藤訳 川島書店一九八〇
- 8 Piaget, J., 『知能の心理学』波多野ほか訳 みすず書房一九七〇
- 9 Rutter, M., *Maternal Deprivation*, Harmondsworth, Penguin Books Ltd., 1972.
- 10 Schaffer, H.R. & P.E. Emerson, "The development of social attachments in infancy," *Monographs of the Society for Research in Child Development*, Vol. 29, No. 94, 1964
- 11 Spitz, R., 『母子関係の成り立ち』古賀訳 同文書院一九六七

(津田塾大学)



## 私の保育

—子どもたちから学んだもの—

### 野口智恵子

ある機会があつて、「自由あそびの場において、子どものあそびを育て発展させていくには教師はどのようなかわり方をしたらよいか」と云う研究テーマに沿つて、毎日の保育の実践例や記録を基に勉強することになった。

勉強不足で粗末な保育を研究資料として提供することに困惑したけれども、今、私たちが行なっている「あそびを大事にする保育」を（こうした保育を自由保育形態と呼んでるようですが勉強不足で確信がないので呼べない）、客観的な立場で研究会の方や、講師の先生の御助言を頂きながら保育の見直しをすることもよい機会ではないかと思ひ

切つてみた。

研究会を重ねていく度に、日頃の保育の問題点や疑問などの悩みや不安が、先生方の示唆によって迷いがほぐれ、自分の保育の姿がよく見えるようになって来た。

あそびの保育の重要性と教師のあり方の認識を深め、これからの保育に勇氣と希望が与えられたと共に、一層責任重大な仕事であることを自覚した。

子どもの心身の発達をうながす原動力は子ども自身の充分なあそびの体験から、子どものあそびの生活の中から生まれ育つていくものであること、そして、一人ひとりの子どもに個性があり、その個性を發揮しながら育つていく場は、充実した楽しいあそびの場であることを——五、六年前から始められた障害児教育から私たちは多くの事を学び教わることができた。障害児教育を始めて、まだ日は浅いけれども、キリスト教人間愛、平等観、治療的な観点から障害児であっても人間として、かけがえのない大切な一人であること、差別や偏見をしてはならないこと、一般児と障害児と共に生活し保育され、共存し合つていくことの重要性を主張し努力して来た。その様な生活の中で私たちは気がつかないでいたが、最も大切な事である。子どもをよく

知る基本的なものの見方、考え方を改めさせてくれた。障害児ばかりでなく一般児でもいろいろなハンディキャップを持った子どもが多くいることである。お友だちとなかなか遊べない子、粗暴な子、過保護な子、運動ぎらいな子とさまざまな問題を抱えている、そういう子どもたち一人ひとりを大事に保育し、どの子も心を開いて充実した楽しい、よるこびのある生活のできる場、保育をしなければいけない。

従来通りの一斉保育形態では、障害児の入る場は限られてしまうし、一般児であっても一定の枠の中で、みんなと一緒に活動し静かにしてお話を聞くことに努力のいることであるのに、障害児もみんなと一緒にすることが大事だからと云って興味も関心もないものを無理にしつけようとするあり方に、子どもの気持を無視した大きな誤りに気づき、何んとか他の方法で一緒に出来るものはないだろうかと悪戦苦闘の毎日であったが、障害児と一般児が、ごく自然にあそんでいる姿が見られるようになった。私たちのねがっていたことが子どもたちのあそびの中から芽ばえ育ち始めていることにおどろき、子どものすばらしさに感激した。

あまりの好ましい情景に、このままそっとしておいてあげたい。「もうノヤめたノ」と満足ゆくまでと——しかし一方では、そろそろ今日の中心活動の時間だと時計を睨みながら「お始まりよ」「おかたづけよ」と子どものあそびを簡単に止めさせてしまうことがしばしば。そんな時子どもから返ってくることは「もうお始まり つまんないな」「もっと あそびたいな」「また後であそぼう」といかにも残念で仕方ないという感じで、聞く度に胸が痛む。これでよいのかしらとカリキュラムとあそびの問題で悩み葛藤の日々であった。

子どもがあそびに熱中している時の眼の輝きはすばらしく美しい。からだいっぱい動かしてビチビチとあそび廻っている。あそびの楽しい雰囲気か回りの者にも伝わって来る。「おもしろそうだね 仲間に入れてね」とことばをかけたくなる。そんな時、教師も仲間に入れてもらってあそんでみると、意外に楽しいあそびが次から次へと変化していつて少しも退屈しない。いろいろなものが見えて来る。

ある日、ワンパク坊のMとSの二人が、園庭の片隅にしゃがみ込んでかなりの時間、木片で地面の土をゴソゴソと削っている。粉の様な柔らかな少し湿りけのある砂をかき

集めておだんご作りに余念がない。「おもしろい」と声をかけると、「うん おもしろいよ ほらこのおだんごすごく固いよ」「こわれないおだんご作っているんだよ」「先生もやってみたら」と誘われて、固い地面を削る。思った程楽な仕事ではない。なかなか根気のいる仕事だ。一度に多く出れないが徐々にカタクリ粉の様な砂が溜って来る。柔らかくてシヨシヨとして気持ちよい感触だ。おにぎりの要領でおだんご作りをするけれどもなかなか固まらない。「先生の少しもできないよ」と困っていると「僕みたいにこうやるといいよ」と教えてくれる。「先生は、まだ始めたばかりだからね練習すればできるよ」と励ましのことばまでかけてくれた。何回か握っているうちに固まっていく微妙な感覚、コツを憶えておだんごが出来上ったときはうれしくて大事な宝物のような気がした。一生けんめいしていると女の子たちも仲間に入れてと寄って来てにぎやかなだんご作りになった。出来上ったのを教えてみるのも楽しいものだ。「もう 十一コも出来たよ 赤組さんみんなのを作ろうよ」とおだんご作りのあそびが続く。

子どもと向い合ってじっくりあそんだことで今まで想像もしなかった、ワンパク坊のMから思いやりのあるやさし

いことばに接して改めてMの内面を知ることが出来て何よりよかった。Mも先生と一緒にだんご作りをしたことで満足したことだろう。心が打ち解け共感し合ったよろこびを素直に生活の場で現わしてくれるようになった。あそんだ後の気分のよさ、充実感を味わってみて、子どもたちがあそびに夢中になりおもしろくて仕方がない気持がよく理解出来るようになった。

楽しい経験を重ねていく中に、子どもたちのあそびの様相にも変化が見られるようになった。よろこんで登園して来る。一人ほんやり立っている子が少なくなった。あそびがダイナミックになった。自分の好きなあそびを見つめもくもくとあそんでいる。一人あそびを充分経験した子は気の合った仲間同志でグループあそびを楽しんでいる等々、何よりも元気な子ばかりになったことである。

子どものあそびの様子を見ていると、あそびには段階と云うか道筋、順序があって、そのあそびの流れに沿ってあそびが深められ発展されていくようだ。子どもたちはそれらを自然に身につけているようだ。生活に必要な知恵とかテクニク、あそび方、コツ、あそびのルールなど自分たちのあそびの経験から、自分の体ごとで習得しているよう



だ。一斉保育ではこの様なことはあまり見られなかったような気がする。一人ひとりの子が満足してあそびの生活を楽しみ友だち関係も深まり豊かになってきた。

しかし、その反面気がかりな問題も多く出て来て、「あそびの理解」で教師間の意見の違いも見られる。子どもの自発的なあそびを大事にと子どもの自由なあそびのまままでよいのだろうか。放任、マンネリ化、生活のきまりしつけ面の乱れ等々。

幼稚園の生活あそびは、家庭のあそびと同じであったり延長のようなものではなく、そこには教師の行き届いた教育的な配慮や環境見守りがなければならぬ。そして、子どもの自主性を尊重しながら望ましい豊かな経験を通じて豊かな人間として成長させていくことではないかと、真剣に「あそびの保育」を考えいろいろな本を読み勉強する。他の園の見学をしたりしたが、やはり自分たちの園に合ったものを自分たちの手で試行錯誤しながら見つけ出さなくてはと一斉的な保育形態から脱皮しながら、徐々に、子どものあそびの状態によって日課の枠が崩されていく週の日を思い切りあそぶ日とした試みが二日三日と必要に応じて増して行き現在では殆んどあそびの保育と

なった。

あそびの時間の延長ばかりでなく、人生の基礎を育てる大切な幼児期を充実した生活経験をさせるべく環境づくりを大事にと園長先生の手づくりの遊具、ままごと小屋、体力づくりのための丸太の遊具が次々に園庭に作られる。にわとり、あひる、うさぎの放し飼いと豊かな生活経験をさせてあげたい。特に現代では野趣的なあそびの少ない子どもたちに経験させたい、のねがいを持って努力改善されてきたが、もっと大切なことは、将来ある子に接する教師の態度あり方が問題である。

一人ひとりの個性をよく知りその子の可能性を信じて大切に保育していくことであり、たえず活動し成長していく子どもたちをよく見つめねがいを持ってその場に合った配慮や手助けのできるよう一層の努力が必要である。特に先入観や色眼鏡で子どもを見ないで正しく理解するようにしたい。保育年数はかり重ねた年配者の私は、新鮮な気持ちで子どもに接することを心がけたい。そして、子どもとたくさんあそぶことをしよう。その中で子どものあそびの夢を見つげ大きく育てよう。一人ひとりの子から考え出される一つ一つによく耳を傾け、大切に取上げながら、お友達

ちみんなが力を發揮して、夢を育てあげていこうとする雲  
囲気を大事にし、どの子も充実したよろこびのある生活を  
したい。友だちを大事にする思いやりのある明かるい子ど  
もたちであってほしいとねがいを持って始まった今年の四  
月、入園して間もない頃子どもあそびから始まった「オ  
オカミごっこ」のあそびが半年近くも子どもたちの大好き  
なあそびとして、毎日とほほいい程あそび継がれたもの  
はない。今でも、時おり、「オオカミごっこしようよ」と  
口に出る程である。子どもと教師が一緒になって思い切り  
あそんだあの楽しさ、盛り上りを、充実感を、互いに共感  
し合ったあの味わいを忘れがたく一つの生き甲斐として求  
めつつけているのかもしれない。

入園したばかりの幼稚園は泣く子や跳ね回る子とおちつ  
かない日々、ある日、園庭のブランコを基地にして四歳児  
の子が五六人集まってごちゃごちゃしたあそびを始めた。  
その仲間の中に新入園児も加わってあそんでいる。

「おや 今朝はめずらしく仲よくあそんでいるな」 その  
ままうまくあそんでくれるといいがなと祈る気持でしばら  
く様子を見ていた。一人の子が教師に気づいて、

「オオカミごっこしているの」

「先生も入って」

「Ｙちゃんがオオカミなんだよ」

と、あそびの説明をしてくれた。

「先生はこやぎさんになろうと」

と仲間に入れてもらって「オオカミごっこ」が始まったが、

まず、子ども同志のあそびの時には、男の子の「ウォー」

の一声で「キアー」と女の子が喚声をあげて逃げ回る単純

なものだったのに、Ｙ児がオオカミで、小やぎでと役がは

っきりしたことであそびの雰囲気が変わって、どうやら「七

ひきのこやぎ」のようなあそびになった。

Ｙ児「トントーン、お母さんだよ」

小やぎ「足を見せて」

Ｙ児「ちがうよ 始めは手を見るんだよ」

小やぎ「あゝそうか 手をみせて」

とそんなやり取りをしながらあそびが展開されていった。

子どもたちから、

「今度 先生がオオカミになって」

「よし 先生のオオカミはこわいぞ」

といいながら、そうだ、こんなにもみんながよろこんであ  
そんでいる。クラスをあそびとして「七ひきのこやぎ」を

取り上げてみようかと即座にグリム童話の「オオカミと七ひきのこやぎ」のこぼを思い出し、あそびに取り入れてみると、子どもたちはこやぎになり切って乗って来る。こやぎを呑み込んだオオカミのお腹を切る真似をして、本物の石を本気になって詰め込まれてはお手上げ「まいったー」子どもたちは「オオカミ死んだ死んだ」とよるこびの歓声をあげる。メタメタにされたけれども夢中であそび、みんな本当に楽しかった満足しきった顔々ばかりだった。

一息する間もなく元気な子たちは「七ひきのこやぎの絵本読んでー」「桃組さんの時に読んでもらったことあるよ」と急ぎ立てる。何んとエネルギッシュな子どもたちだろう。みんなで今度は図書室へとそろそろと行き、フェリス・ホフマンの「オオカミと七ひきのこやぎ」の絵本を読み聞かせをする。子どもたちは、眼を輝やかせ一心に聞き入っている。みんなの心が一つになってあそぶこと、仕事をすることのすばらしさ、よろこびをかみしめながら、お話を聞きながらも、子どもたちの心の中には、七ひきのこやぎごっここのイメージ化が深まっていったのだろうか。

「お面つけて、やろうよ」

「わたしは 赤ちゃんやぎになるよ」

「わたしは お母さんやぎになるよ」

「わたしは 一番目のお姉さんやぎね」

と、夢はぐんぐんと力強くふくらみ高まっていく。子どもたちの創造力のすばらしさに圧倒されそうだ。子どもたちの面から泉のように湧いて出るイメージを上手にコントロールしていく。子どもたちと話し合い納得し合いながら、手順を考え一つ一つ着実におさえ習得させていくことが教師のかかわり方ではないだろうか。子どもたちの主体性を尊重し教師のねがいもそこからみ合せながら共に高め合い育て合っていくものではないだろうか。

なおこの「オオカミと七ひきのこやぎごっこ」のあそびはいろいろなあそびに派生しながら発展していった。その度に、教師のかかわり方について深く考える場であったり、子どもから学ぶことも多くあって勉強することが出来た。これからも子どもたちと心で結びついた生活が多くできるように子どもと共に見つけ出していきたい。

その時々を、精いっぱい生活するよろこびを経験した子どもたちは、大きく、たくましく、自分の力で力強く、そして、人間らしく豊かな心を忘れずに生きていってほしいとねがいをこめて。

(長野・松本聖十字幼稚園)

## 続・保育の中の小さなこと大切なこと⑦

守 永 英 子

三学期にはいると、最年長のクラスでは、卒業までに、しておかなければならない仕事に追われて、忙しくなる。

保育者だけが忙しい仕事もあれば、子どもにもしてもらいたい仕事もある。

昨年、秋に、それぞれの子どもが、絵の具でかいた絵を、表紙にして作る、卒業アルバムも出来上がってきているので、子どもに、名前を書いてもらわなければならぬ。例年、アルバムの中に、貼ってあげるはり絵も、作らせた。

こんな毎日が続く中で、私は、ふと、朝の電車の中で、自分の「思い」が、いつもと違うことに気がついた。

朝、保育の場に向う保育者として、今日、展開されるであろう保育について、思い廻らすことは、いつもながらのことであったが、その様相が、いつもと、少し違うのである。

いつもであれば、思い廻らす事柄は、ある時は、T子の友人間のトラブルの多さであったり、S郎の日頃消極的な動き

であったり、K男のグループのあらあらしい行動であったり、又、時には、クラス全体の傾向としての、物の扱いの乱雑さであったりする。

そして、そのような気にかかる、個人や、グループや、クラスの傾向などの、それぞれの情況が、課題として私の前に立ちただかり、私もまた、その課題について思い廻らす。保育の終ったあとや、保育の始まる前はひと時を、気にかかる情況の原因や、私自身の対応の仕方や、その親への働きかけなどを求めて、心が廻るのである。

しかし、保育者が、しなければならぬこと、あるいは、子どもに、させなければならぬように、追われているような忙しい時では、様相が違ってくる。

いつもと違い、思い廻らす心の中心に、「子ども」が、位置していないことに気付いて、私は、はっとした。「子ども」の代りに、「しなければならぬ事柄」が、心の中心を占め

ていたのである。

当然といえば当然のことであった。そして、「忙しい時期」という以外に、とりたてて、特別な情況に置かれているわけではないことに気づき、はっとして、自分に、驚きを感じた。

確かに、心の中心を占めるものが、入れ代ることによって保育の見え方、子どもの見え方が、変るように思われる。

「ひとりの人間」という、トータルな存在としての「子ども」の姿が薄れて、おとなが「させたいこと」「してほしいこと」という物差しを当てた側面だけが拡大されて見えてくる。そのことに気付かず、うっかりそれに身をまかせれば、拡大された面から、「子どもそのもの」を評価するという落とし穴に陥らないとも限らない。

「忙しい時期」に、自分の心の変化に気付いて、はっとした、ということは裏返せば、普段の保育は、それぞれの子どもがそれぞれに成長すべく、「子ども」に焦点を当てて、保育が考えられてきた、ということに他ならない。考えてみれば、以前は、もっと子どもに「させたいこと」「してほしいこと」に、平常も追われていたような気がする。

このように、反省しながらも、卒業という大きな区切りの前には、やはり、いろいろと予定に追われる。三月は、また、行事も立て込む。年長組では、二月後半からの、おひなさま作り、小学校からの招待で、一年生と遊ぶ日、小学校か

らの、ひなまつりへの招待、幼稚園のひなまつり、誕生会、年少児とのお別れ会、などと忙しく、子ども本来の「みずから工夫し、遊ぶ生活」が、著しく減ずる。私の気持も、予定をこなすことに向けられる。

行事が一通り済んで幼稚園生活の最後の日々を、心ゆくまで過ごさせようと心に決めた時、穏やかな気持で、子どもたちを見守ることができ、再び、子どもがトータルな存在として見えてきた。

幼稚園での最後のおべんとうの日、子どもたちは、幼稚園生活を惜しむかのように、実に、生き生きと一日を過ごした。画用紙と割り箸とストローで、動くポイントを工夫した線路を作っている人達、それぞれ好きな紙芝居を作っている人達、砂場全体を使って、裸足で水や砂に取り組んでいる人達。

そして、「そろそろ、かたづけましょうよ」という私に、彼等は、言ったものである。「おねがだからもうちょっと、時間を頂だいよ」

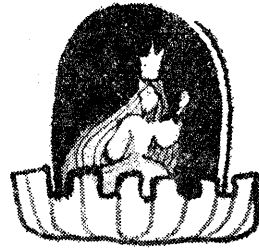
まことに、健康な申し出である。そして、この言葉は、世の中の保育全体に対して、子どもたちが、叫びたい言葉なのではないだろうか、と、ふと思っただけである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

# 遊びと子どもの発達 ⑩

## 描画のあそび(その三)

加古里子



子ども達は自分が抱いた思考を、指先の動きで平面的図形で表現できる技術と、その満足を得ると、それは次にもっと複雑な思考のあれこれを、もっと多様な図形で表現しようという意欲にかられる。多少の困難や煩わしさは、完遂時の喜びを増す薬味となつて子ども達を励ます。

その思考とそれに対応する図形の種類に、子ども達は文字というものをくり入れる。学齢前の幼児であっても、大人や兄弟の生活や外界社会の様子から、文字の機能を認知して自分に応じた文字のいくつかを自分のものとする、それを早速自由な遊びの場

に応用する事をする。文字教育の指導の場ではないから、ひらがな優先も当用漢字も無関係で、ともかくも子ども達の「手のとどく範囲」のものが活用され動員される事となる。

そのひとつに「ツルサン」と呼ぶ一連のものがある。代表的な例は、次のようなものである。

「ツルサン①」

- (1) つる
- (2) さん
- (3) まるまる
- (4) ムシ

この絵かき遊びで注目しなければならぬ点がいくつかある。そ

の第1のものは、記号的表示を組合せて、人の顔という図形をえがいている点である。その表示は簡単なものではない。線の形は簡単であるが、ひらがな(つ・る・し)カタカナ(ハ・ム)漢字(三)という文字と印形記号(○)の四種もが使われている。

更にその組合せ方によって、横向き①と正面向き②の差を生ずることである。

そして子ども達は、自分が知っている文字や表示しうる記号によってつくりあげたこの画像が、何となく面白い禿げ頭のおじさんの顔であるという事である。(該当の方はひどく気に病んでおられ、誠に申訳ない至りであるが、子ども達にとってそれは大人の中でも親しみのもてる苦労人と映るらしく、だからさんづけをして愛称するのである)ここで子ども達の遊びのもつ(一)自分達に關する事で(二)その方法が理解でき(三)過程や結果が面白いという三条件にびったり合致している事を知る。

そうした上で面白い事には、この禿頭苦労人を、多少若返りさせたい為だろうか、ひたいのしわを少なくした③があるという事である。

#### 「ツルサン」③

- (1) つる
- (2) ニハ
- (3) まるまる
- (4) ムシ

前述①に対し②という正面形があつた如くここでも正面形④が登場する。もちろん①と③のどちらが先に出来たかは、全国分布調査からも判別できない。その音韻的な律動や画像によせる愛着面から、①の方が多数を占める事は当然で、それがまた絵かき遊び成立の主軸であつたと推測される。その点から述べれば、次の⑤形は、更に下支流となる。

#### 「ツルサン」⑤

- (1) つる
- (2) ハ
- (3) まるまる
- (4) ムシ

前述と同様な型をふんで、正面形⑥が存在している。

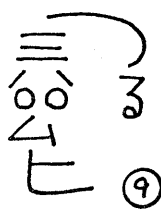
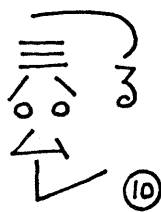
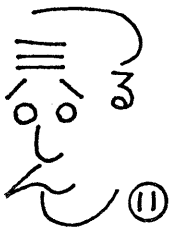
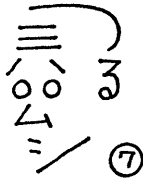
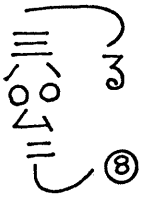
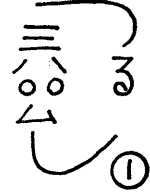
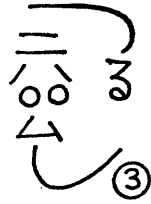
このように一つの図形を主軸として、その変形異形を多様にうみ出して行く子ども達の試みは、単に出来た画像の年齢にのみ注意しているだけではない。

ひらがな、カタカナ等を随意に自由に使用してこの「ツルサン」を形成して来たのであるから、その方針からいえば①と同じ音韻歌詞であっても、文字形を異にする時、微妙な表現となる事を子ども達は⑦で知つたのである。

#### 「ツルサン」⑦

- (1) つる
- (2) さんハ
- (3) まるまる
- (4) ムシ

ツルサン





最後のしかん、にかわつただけであるが、そこにえがかれた画像は①のむつり無口形より、うすぎながらはつきりとした唇を持つに至る。当然の事ながら⑦には正面形は存在しない。だが唇を得た形は、し↓シとしての偶然性ではなく、⑧⑨のようにはっきりとした意識形となつて発展する。

「ツルサン⑧」

- (1) つる (2) さんハ (3) まるまる (4) ムニシ

「ツルサン⑨」

- (1) つる (2) さんハ (3) まるまる (4) ムヒ

⑧⑨には正面形がないのは当然である。

このような傾向は更に次のような⑩⑪をうみ出してゆく。

「ツルサン⑩」

- (1) つる (2) さんハ (3) まるまる (4) ムレ

「ツルサン⑪」

- (1) つる (2) さんハ (3) まるまる (4) しんし

以上の事柄は単に一つの気に入った画像を得た時、その画像に

関係し、同工異曲のものをさがし尽すという、たとえは少々とぶけれど、一つの発明の権利を確保する為、その周辺各種の技術の特許として防衛出願する方策とだけ理解してはならないだろう。むしろ逆に一つの画像に至る迄に、こうした各種各様の試行錯誤があつた中で一つの代表典型がもてはやされるに至つたという、口承伝承の法則が支えとなつていて考えるべきである。従つてこの法則は以上のような口唇周囲に止まるものではなく、画像の各部、例えば目では「の」とか「ハ」「ト」「まるてん」等が、耳では「リ」「つ」「ろ」などが転用借用され、それぞれかわつた表情をもつて子ども達にまみえる事となつている。

子ども達の興味の対象となつたとき、その周辺のあらゆるものを活用して進むその迫力とエネルギーを、教育や文化面に汲みあげ、彼等自身の為に資してやる日は何時の事なのだろうか。

参考文献

- 1) 加古…遊びの創造、明治図書(69)
- 2) 同…あそびと教育、国土社(69)
- 3) 同…遊び、フジ総合研究所(73)
- 4) 同…子どもの遊びと考える力、指導と評価(78)

〔遊びと子どもの発達⑩(「描画のあそび」その二)の〕  
〔原稿が行方不明のため、欠番として扱いました。〕

## 子どもとの出会いの中で学ぶこと ②

水 沼 昭 子

四月に入園した四歳児も少しずつ園生活に慣れて、自分の「遊び」や「場」をみつけ、安定しはじめる六月には、年長児にとっても年長としての気負いが、スウッとぬけて、本来のその子らしさを良くも悪くも出して来る。

そうした六月のある日、年長のH夫達数人が遊戯室の箱つきを占領して遊びはじめた。皆、「積木」と云う同じ素材を手にしながらも、各自、異なる遊びのイメージで積木を積んだり、並べたりしている。一つの、同じイメージの遊びをみつけ出す為の、又、遊びを一つのイメージにして行く導入の様なひとときがすぎる。その内、H夫の大声が遊戯室に響く。「ちがうってば！」「だめだぞ」……やはりH夫らしいナと思う。

H夫は年少の頃から、自分中心で遊びや仲間選びしてしま

うタイプの子であった。ライダーごっこに夢中で、自分が主役をとらなければ遊べない。思うように仲間が動いてくれないと大声で「だめ！」「いれてあげない」……が始まる。そして、仲間が遊びから離れて行くとつまらそうな表情でテラスを行ったり来たりする。一人っ子らしいのびやかな面と、自分の思いを上手に他に伝えたり、自分をおさえたりする事のが手な子であった。こうしたH夫の園生活での状態を、保育者が規制することではなく、遊びの中で、がまんしたり、思いの伝え合いをして行く様に、さらに仲間にはH夫の強引さだけでなく本来もつのびやかな部分を遊びの中で知らせたいと話しあった。

H夫たちの積木はやっと大きなマストを持った帆船になった。大小の積木をうまく使った甲板には、ままごとセットや

ソファのクッションまで持ち込まれている。この船のすぐ脇を、他の子どもに呼ばれて通りかかった私に声がかかった。

「あゝあそこに人がいるぞ」。マストの横で両手を双眼鏡のようにしてH夫がさげふ。思わず足下の積木の一つに飛び乗ると私もふざける。「たすけてくださいーい」H夫に手をふりながら助けを求める。「よおし、まってるろ」みんな、あの島に人間がいるぞ、いそいで行け」

H夫の命令でTとNが海に飛び込む。一瞬にして、遊戯室は大海原となり、私は漂流者となって彼等の遊びに加えられた。TとNが近づいてくる。「わたしおよげないんです」なさない声で私は訴える。「よし、まってる。みんな積木を用意しろ」船へむけてNが命令を出す。H夫たち、船上で待機する者がその命令に従ってN達のところに行く。「つみき、ならべろ、あわてないで」TやNのリードで私の立つ積木島の隣りへ、順々に積木が並んで、私は一步一步、船に近づき無事故出された。

TとNのリーダーシップはみごとだった。いつもH夫の強引さに押され気味であった彼等が、むしろ生々と、H夫に命令し、H夫も当然と云った表情で従った。今までH夫は遊び

を作り出すことよりも、遊びをこわす、トラブルを起す側に立つことが多かった。そしていつも、仲間から訴えられる側であった。この救出のプロセスは、H夫達の遊びのイメージに、同じ思いで出会う相手があった事で、彼等は遊びをひろげ、遊びを作り出す側に立った。

遊戯室で他の遊びをしながら、この一連のようすをおもしろそうにながめていた他の子ども達はきつと「おもしろい遊びしてるナ」と思うと同時に、H夫達の今までとは違った姿をみたに違いない。帆船の中で、喜々として、時にはTやNに従って遊ぶH夫の姿の中に、新しい成長をみる思いがしてうれしかった。

私達は一人の子どもの出会いの中で、時として「どうしてするの」「やくそくわすれたの」と向い合う。保育者の硬い対応や言葉ではなく、その時々、子ども達の内面をみつめて、彼等の何気ない遊びの中から新しい成長の芽と、乗り越えさせたい成長のステップをそれぞれ育て、乗り越えさせたいと、「積木島」から無事故出され、心からそう思った。

(千葉・愛隣幼稚園)

# 『復刻・幼児の教育』〈大正・昭和篇〉

〔趣旨〕

『幼児の教育』誌は、明治三十四年『婦人と子ども』と題されて創刊されて以来、今日に至る迄八十年の長きに亘り、わが国幼児教育の発展と歩みを共にして来た。この間、幾多の先駆的保育理論、実践研究発表等が誌上を飾り、わが国の幼児教育の発展に測り知れない寄与を成して来た。現在まで継続する幼児教育専門誌として、わが国最長であるのみならず、雑誌出版史上、極めて稀な例を示している。

本書は、昨年刊行の『復刻・幼児の教育』(第一期・明治三十四年〜大正九年)に続き、大正十年〜昭和十九年の二十四年分、二十四巻を、一挙に復刻刊行するものである。大正・昭和期はわが国幼児保育が日進月歩の高進を示し、時代背景もめまぐるしい変貌を遂げた時期にあたる。

わが国の幼児教育の進歩の様相を概観する好個の原資料として、また先達の抱負や熱意の結晶する稀有な文献として、

現代保育を考える人々に資することを念願する。

〔体裁・内容〕

全二三巻、別冊著者別索引

〈第二二巻〜第四四巻〉大正十年〜昭和十九年

『幼児教育』(第二三巻第八号まで)

『幼児の教育』(第二三巻第九号以降)

〔刊行〕 名著刊行会

〔定価〕 現金価格二二五、〇〇〇円

〔申込・問合わせ先〕

総発売元・株式会社コーディック

東京事務所 千代田区神田神保町三二二五 精和ビル

TEL (〇三) 二九五―三五六一

大阪本社 大阪市西区北堀江町三一六一―二三

TEL (〇六) 五三一―九八〇一

## 『幼児の教育』復刻記念懸賞論文募集

このたび、雑誌『幼児の教育』復刻を記念して、左記の要領で論文を募集することになりました。多くの方々が、優れた論文をおよそくいただきますことを、期待しております。

### 〔記〕

一、第一期、第二期の復刻『幼児の教育』を素材として、独自の考察を試みたものであること。

一、応募期日 昭和五十六年九月末日まで

一、応募要領 ペン書き（またはボールペン）とし、四千字詰縦書き原稿用紙に四十枚以上百枚以内。上表紙に「復刻記念懸賞論文」と朱書の  
上、「論文題目」「姓名」「住所」「所属」を記入のこと。審査は上表紙を外し、本文のみを対象

として行ないます。尚、名前入りの原稿用紙は御遠慮下さい。

一、賞金及び賞品 最優秀賞一名 賞金二十万円

二等賞 二名 五万円

三等賞 三名 一万円

参加賞 全員 記念品

最優秀論文は、本誌に掲載いたします。

一、問い合わせ及び応募先

〒112 東京都文京区大塚二―一―一 お茶の水女子大学附属  
幼稚園内 日本幼稚園協会『幼児の教育』編集部

尚、電話での問い合わせは御遠慮下さい。郵便でお願いいたします。

主催 『幼児の教育』編集部  
後援 株式会社コーディック

★ 講演 ★

## 永井荷風『狐』を読む

前 田 愛

〔昨年十二月六日に行なわれた、児童文化研究誌『舞々』同人主催による講演会より〕

### はじめに

きょうは、荷風の『狐』という短い作品をだしに使って、ちょっと、お話しさせていただきたいと思うわけです。

この『狐』は、荷風の少年時代というよりむしろ、幼年時代を扱った作品ですけれども、それを、いわゆる深層心理の側から考える、それから二番目に、この作品を、江戸から明治へという歴史的、文化的なコンテキストにからめて考えてみようと思うわけです。

### (一) 「私」から荷風の深層を考える

#### 1 『狐』を書いた頃の荷風

荷風という人は、あまり少年を扱うということはなかった人で、この『狐』という作品と、『すみだ川』という作品がありますけれども、この二つぐらいが、荷風としては、子どもを扱った数少ない作品ではないかと、そんな風に思います。

『狐』という作品が書かれたのは、明治四十一年なんです、

荷風が、アメリカとフランス合わせて、五年程外遊しておりすが——それから帰ってまいりまして、まもなく書いた作品というわけになります。

荷風のお父さんは、内務省の官吏であり、退職してから、実業界に乗り出して、かなり成功した、いわば明治の第一世代である。お父さんは、やはり、荷風を官界ないし実業界で出世せよと考えたのですが、荷風は、そういう父親の意志に背いて、結局は、作家になる。実は、アメリカ、フランスへの留学、これは、お父さんの心積もりでは、その間に、学問をして、日本へ帰ってきてから相当の地位に着いてもらいたいということだったろうと思います。アメリカ、フランスの外遊から帰ってきた荷風は、市ヶ谷の監獄の近くの、大久保余丁町という所——お父さんの家——に、しばらく落ち着くのですが、親友に、こんな葉書を送っているのです。

「家の方は例の如く別に何のこともなく済んだ。帰ってみると、何となく昨夜のことが思い出される。妙に淋しくて今夜も毎夜でも街中をぶらぶら歩いていたいような気がする。親があり兄弟があり成功した知己のある身の上が、なんだか居すらくていやだ。縁側から見る庭の樹木が恐ろしいほど暗くて僕は妙に気が狂っていくようならぬ。」

これは明治四十一年の七月二十六日付の葉書で、その前の晩に、どうも、友達と一緒に、夜遅くまで遊んで帰ってきて、その次の日に、葉書を認めたことでしょう。とにかく、毎晩でも町中

をぶらぶら歩いていた。しかし、一方で父親からの無言の圧力を感じている。明治時代は、外遊して帰った人というのは、責任ある地位に着くということが期待されていた。荷風というのは、そういう世俗的地位というのを獲得するというような、そういう考えは、毛頭ない。そこで、夏の木立ちがいっぱい茂っている庭先を眺めながら、大変憂うつになっていた、というのが、この頃の荷風の心境じゃないか、そんな風に思うわけです。

これと似たような感想は、ほかの小品にも書かれておりまして、この頃書かれたものに、『監獄所の裏』というのがあるので、そこに、こんな言葉が出てきます。

「日本の夜の暗いことは、とても言葉には言い尽くせません。死よりも、墓よりも暗く冷たく、淋しい。いかなる憤怒絶望の刃やいばを持ってするも、つんざきがたく、いかなる怨恨、悪念の焰を持ってするも、破りがたい闇の牆壁とでもいまいましようか……」

こんな風にあります。

荷風にとって、この頃は、アメリカ、フランスの外遊の思い出というものを、かみしめていた時期です。日本に帰ってみると、日本の風土というのは、非常に暗い。特に、荷風の印象に残ったのは、日本の夏の木立ちのうっそうとした茂りだったのではないだろうか。

そういう中で、荷風は、こんなことを考えたのではないか。五年の間、日本という根っこから離れて、外国で、独り暮しを続け

てきた。そういうところで、「自分にとって、日本とは何か。日本の風土とは何か。また、自分の生まれ育った場所というもの、また、その存在の根っこは何か。」、そういうような疑問を育ててきたのではないか。そういう風に考えてきますと、『狐』という作品で、荷風が生まれた家、幼年時代の体験を振り返ることに、かなり重い意味があつたのではないか、そんな風に考えるのです。

## 2 荷風の幼年時代と『狐』の時代設定

荷風が生まれたのは、明治十二年、小石川金富町という所です。この金富町というのは、今日では、町名が変わってしまいました。このお茶の水女子大学から、かなり近い所にあるのであります。地下鉄の茗荷谷の駅と後樂園の駅のちょうど中間の所を、ちょっと上上がったのが、金富町です。今は、荷風の家の跡というのは、まったく残っておりませんけれども。

荷風が金富町の家に通じたのは、そう長くないのです。というのは、この金富町の家から、母方の祖父の家が下谷にありましたので、そこで随分長い間、養育されてきました。

明治十九年に、金富町の家に戻ってまいりました。そして、小日向の黒田小学校に入学するわけです。

荷風が回想しているところによりますと、海軍服に半ズボンというハイカラな姿で、小学校へ行く。完全に山の手の、お坊ちゃんスタイルであります。

明治十九年といえますと、いわゆる「鹿鳴館時代」で、でき上ったばかりの鹿鳴館で、婦人達が、あの、パッルススタイルという特有の裾の広がったスカートをはいて、マズルカやカドリールを、踊っているという、そういう時代でありました。

荷風のお父さんは、さっきもいいましたように、内務省の高級官吏でありまして、青年時代に、アメリカに留学したこともありまして、鹿鳴館時代の先端を行く、そういう人であり、西洋風の生活をとっていました。

荷風が、後年、書いた回想を読みますと、十畳の居間に、じゅうたんを敷いて、テーブルと椅子を備えつけ、そこを、一種の洋室にする。完全に洋館にするというのは、本当の上級階級でして、荷風のお父さんのような、中流の上ぐらいの暮しの人の場合には、洋風にするというのは、畳の上に、椅子とテーブルを置くということとです。そして、役所から帰ると、スモーキングジャケットを着て、そして、大きなパイプをくゆらしている。そして、読書をする。荷風のお父さんの場合には、漢詩人として、かなり名のあった人でしたから、おそらく、読んでいたのは、洋書も読んでいたでしょうけれど、中国の漢詩が多かったのではないかと思えます。それから、お母さんは、本郷の屯岐殿坂にあった教会に通って、教会で、西洋料理を習っている。その習い覚えた西洋料理を、実際に作って一家に振舞う、そういうような生活だった。

ところが、この『狐』という作品を読みますと、こういう文明開化風の家生活というのはほとんど影をおとしていない。お読



みになった方は、ご存じかと思いますが、父親が、庭の一隅に見われた狐を退治する、その時に、洋服に着がえて、狐退治する。そのあたりに、文明開化の家庭の片鱗というのが伺われるくらいのものであります。

ところで、この『狐』の物語の年代は、だいたい、明治十一、十二年頃ということになっております。書き出しのところは、『もう、三十余年の昔、小日向水道町に――だいたい、これも、この辺の場所ですが――小日向水道町に、水道の水が、露草の間を、野川の如くに流れていた時分のことである。』

こうあります。

ところが、荷風が、実際に、小石川、金富町の家に帰ってまいりましたのは、明治十九年のこととして、その前は、まだ幼くて、自分の家の記憶というのほとんどなかったはずです。つまり、金富町の家に帰ってきた小学校時代の記憶を、ざっと十年ばかり昔へ遡らせて書いている。それが『狐』という作品のフィクションの一つだろうと思うわけでありませう。

### 3 崖上の世界と崖下の世界

ところで、荷風が生まれました、金富町の家というのは、かなり広いわけですし、敷地が、四百何十坪、建坪が百坪ぐらいの家である。そして、この家は、崖の上に新築された住居と、それから、暗い木立ちが、うっそうと生い茂っている崖下の世界、こんな二つの世界に切り分けられるわけです。崖下の風景と

は、「杉の木が、冬でも夏でも、真黒に静かに立っている。」と、こう書かれています。それから、崖の下には、古井戸があって、そこには、へびだのむかでの、げじげじなどがいっぱい住んでいる。そして、井戸のそばには、中が、うつろになった柳の木がある。誰も彼もがこの古井戸のある崖下を無気味な場所と考えている。とりわけ『狐』の中の幼い子ども、『私』と書かれておりますけれど、これは、多分に、荷風の幼年時代に重なり合いますが、この幼い「私」は、崖下の世界というのを、大変恐るわけです。こんな風にかかれていますが、

「夜は古井戸の其底から湧き出るのではないかと云うような心持が久しい後まで私の心を去らなかつた。」

こういう世界として、『狐』では、荷風の家が書かれているのですけれども、この崖下の、何か、おどろおどろしい世界のいわば、精霊というかアニマというのか、あるいは、スピリットといいますが、そういうものとして、狐が現れてくる話であるわけです。事件そのものは、こんな風に書かれています。季節は、「朝寒」といいますから、今頃（十二月六日）よりちょっと前になるかと思えますけれど、父親は、役所に出勤する前に、必ず、庭に下りて、柳の木のそばで、大弓の稽古をする。そのときに、崖下の茂みの中に、何か、狐らしいものの影を認めた、というわけです。それで、父親は、書生と、それから、抱えの人力車夫、――書生を抱え、人力車夫を抱えているのは、当時では、なかなかの豊かな家庭なんです――この二人に命じて狐の搜索をさせる。とこ

ろが結局、狐の姿は、みつからなかった。

ところが、翌年の正月になって、崖の上の家に、にわとり小屋がある。そのにわとり小屋のにわとりが、狐に、食い殺されてしまう。それで、その報復というわけで、大掛りな狐退治が行われる。今申しました書生―田崎というのですが―それから、人力車夫、それから、出入りの鳶職の頭、そういう人達を動員して、父親が指揮を執って狐退治をする。

その日は、一面に雪が降り積もっていたわけですが、小半日ぐらい搜索して、結局、狐退治が成功する。崖下の庭から、狐の死骸をぶら下げて、一同が意気揚揚と引きあげてくる、という、こういう場面になるわけです。

この狐退治というのは、狐の穴を、火薬を買ってきて、いぶしたてるとか、父親が、大弓を持って狙うとか、鳶の頭が、鳶口を持って狙うとか、実に、狐一匹を退治するには、大掛りなものになるわけですけれども、そこで、父親を総大将にした狐狩りの一行が、凱旋するところを、ちょっと読んでみます。

「大弓を掲げた肥満の父を真先に、田崎と喜助、―この田崎が書生で、喜助が人力車夫ですが―二人して、倒に獲物をつるした天秤棒をかつき、その後、清五郎と安が引き続き、積もった雪を踏みしだき、隊伍も正しく崖の上のたち現われたときには、私は、ふいと絵本で見る忠臣蔵の行列を思い出し、ああ勇ましいと感じた」

これはまさに、忠臣蔵の引き上げのイメージになっているわけ

です。しかし、真近く進んで、書生の田崎が、漢語混じりで、

「坊ちゃんこの通りです。天網恢恢疎にして漏らさずと、差し付ける狐を見ると、鳶口で打ち割られた頭蓋とくいしばった牙の間から、どろどろした生血が、雪にしたたる有様、私は覚えず母親の柔かい袖の陰に顔をおおい隠した。」

こんな風に書かれています。

ここで、「私」の、その殺された狐に対する、あるいは、狐狩りに関する心持ちというのは、二重になっている。それは、どういふことかという点、一つは、狐狩りの企てを、いかにも男らしく、勇ましいと考える、ところが、実際に血みどろになった狐の死骸を、つきつけられると、今度は、母親の柔い袖の陰に顔を隠してしまふ、こういうことだと思えます。

#### 4 「私」の感情の二重性

この『狐』という作品を読む場合には、一方では、父親の勇ましさに魅かれ、一方では、母親の懐の中に、もぐり込んでいこうとする。そういう「私」の二重の感情というのから、考えていかなくなくてはならないだろうと思えます。

「狐」を読みますと、この「私」は、いつも、崖下の木立ちとか、底なしの井戸から、恐怖をそそり立てられている、そういう子どもである。そして、そういう「私」にとつての、避難所というのは、例えば、母乳である。あるいは、母親である。

しかし、よく読んでみますと、そういう崖下の暗い世界、おど

ろおどろしい世界、そういうものを恐れている「私」というのは、実は、一番深い所で、そういう所に魅かれていているということであります。

それは、俗に「恐いもの見たさ」ということを言うけれども、それだけではないのではないか、『狐』の中に、こういう文章があります。

「恐いものは見たい。おそるおそる訊く私が知識の若芽を乳母はいろいろな迷信のはさみで切り摘んだ」

こういう「私」が、崖下の世界を、恐れるというのは、結局は、母親のやさしさというところに、一番の原因があると、こう考えた方がよろしいかと思えます。

「私」の場合、崖下の世界というのは、大人のお伴がなければ、自由に歩き廻ることができない、そういう禁忌の場所になっている。それから、古井戸のそばにある柳ですが、その柳に、いつも悪いことをすると、縛りつけるという風に、おどかされている。それから「私」は、いったんは父親と一緒に、狐退治をしようと思うのですが、母親から、風邪をひくから、という理由でさし止められてしまう。『狐』という作品を読んてみますと、「私」は、正月に、たこ上げをして遊ぶというような描写は、あるんですけども、普段は、家の中で、お母さんと一緒に、ままごとをしたり、絵草紙を広げたり、そういう子どもとして描かれている。あまり男の子らしいところは、ないわけです。こういう具合に、いつも母親や乳母の保護の許にある、そういう子どもであるから

こそ、今度は、その裏返しとして、崖下の世界というのが、いつまでも恐ろしい世界、うとましい世界としてイメージされてくるのだからと思えます。

こういう崖下の風景というのは、私が、夜みる夢の中にもあらわれる。

「古井戸ばかりかちょうどその傍らにある朽ちかけた柳の老木が、深い自然の約束となって、夢にまで私をおびえさせたことが幾度だかしれなかつた。」

こんな風にかかれてきます。「深い自然の約束」という言葉を手がかりに考えてまいりますと、この崖下の世界というのは、ただ夢の中に出てきたイメージというだけではなく、やはり、幼い「私」の心の底に潜んでいた「何か」を現わしている。

## 5 「私」の内なる母と父の原型

この作品では、崖下の不気味さをいうのが、荷風らしい木目の細かい描写で、よく書かれているわけですけれども、この辺まで話してまいりますと、もう、お察しかと思いますけれども、この崖下の世界というのは、「私」の心の底に、わだかまっていた。いわば、「母なるものの原型」としてうけとめることもできる。あるいは、ユングが言っております。グレートマザー、そういうような概念をここから引き出すこともできるだろうと思えます。ご存じのように、グレートマザーというのが、善と悪と二つの顔を持っている。河合隼雄さんが、『昔話の深層』の中でこう言わ

れている。

「母性は、その根源において、死と生の両面を持っている。

つまり、生み育てる肯定的な面と、すべてを飲み込んで死に到らしめる否定的な面を持つものである。人間の母親も、内的には、このような傾向を持つものである。肯定的な面は、すぐ了解できるが、否定的な面は、子どもを抱き締める力が強すぎるあまり、子どもの自律を妨げ、結局は、子どもを精神的な死に追いやっていく状態として認められる。両者に共通な機能として、包含するということが、考えられるが、これが生につながるときと死につながるときと、両面を持つのである。」

明治の子ども一般を考えますと、男の子はもっと元気に遊んでいたはずだし、それから僕なんかの子どもの頃を考えますと、こういう崖下の暗がり、すみっこ、穴ほことか、そういうのは、遊びの場所として、実におもしろかった。奥野健男さんの『文学における原風景』には、そういう原っぱやすみっこは、縄文的な世界のなごりで、そういうところで子ども達は、縄文人と同じように、いろいろな採集をするのだと説明されています。

荷風の『狐』の場合には、そういう縄文的世界というより、ただ、むやみに恐しい世界、恐い世界として現れる。それは、結局、「私」を束縛している。母親のやさしさを裏返したときに、崖下の世界は、大変おぞましい無気味な世界として現れてくるわけです。勿論、『狐』の中の「私」は、母親のやさしさというものが、自分の男の子らしき、活発さを、窒息させているということに

は、気づかないけれども、そういう母親の世界から独立していろいろという願いを、もう持ち始めている。そんな風に読めるんだろうと思います。

そこで、父親という存在が、意味を持ってくるわけですけれど、父親は、崖下の世界を象徴する狐を退治する。これは、言ってみれば、本当は、この『狐』の中に登場する、「私」が退治しなければいけない。ヨーロッパの神話を見ますと、少年英雄が、怪物を退治するという普遍的なプロットがあるんですけども、実際に、私は、この狐狩りに参加しない。というより、参加しようとするんだが、母親から「風邪をひくから」と、止められて、参加しない。つまり父親が、「私」の代わりに狐を退治してくれる、こういうことになるわけです。

この『狐』を読んでみますと、父親が、一種の大げさに言えば、文化英雄みたいに書かれている。つまり、崖下の世界というのは、非常におどろおどろしい、秩序のない混沌とした世界なのですけれども、そういうものに、ある一定の秩序というものを創り出す—これが、父親の役割である。こういう父親の姿というのは、『狐』の初めの方ですでに書かれているわけです。父親が役所に出かけの前に古井戸のそばの柳の所で、大弓の稽古をする。それが、「私」には、非常に不思議であった。

「父には、どうして風に吠え、雨に泣き、夜を包む老樹の姿が、恐くないのであろう」 こういう風に書かれている。

そして、崖下の、おどろおどろしい世界の中心である古井戸

で、父親は、大弓の稽古をする。——これは、平安時代に、鳴弦と申しまして、弓の弦を鳴らして、悪魔払いをするという儀式がありましたけれど、それを連想させる。それから、古井戸の周りには、腐ったきのこだとか、ぬるぬるした白い腹を見せて、うごめいている虫とかいっぱいいる。泥棒がきたない手拭いを置き忘れていくのも、この井戸のそばである。こういったいろいろの不吉なしるしを、一身に背負ったいけにえとして、狐というものが登場する。ですから、狐を退治するということは、同時に、今申し上げてきた崖下の混沌とした世界というものに、秩序を与える、そういう象徴的なドラマということになるわけです。先ほども申しましたが、狐を退治する、そのときに、父親が大弓を持つ、あるいは、鉄砲が動員される、鳶口、天秤棒で、皆が武装する。それから、火薬店へ行って、火薬を買ってきて、煙硝を燃やすという、実に大掛りなことをする。そんな大掛りなことまでしなくてもいいんですが、それは、今申しました、象徴的な劇としての意味合いというものを、この狐狩りが持っていたからだろうと思います。

しかも、この日は、一面に雪が降って、銀世界になって、その所に「生けにえ」としての狐の血が流れるわけですけれども、その血と雪の色合いのコントラストというのが、ますます、狐狩りの象徴劇の意味合いを強めることになるだろうと思われれます。さて、こうやって狐が退治された。そうすると、今度は、狐狩りに参加した男達は、お祝いの酒盛りをする。そのときに、今度

は、にわとり小屋で飼っておりましたにわとりを、二わつぶして、それを肴に宴会をする。「私」は、もう早くに床に着いておりますけれども、そういう大人達の宴会というものを、何か、割り切れない思いで、この騒ぎを聞いている。

それが、物語の最後になっておりますけれども、こんな風に書かれております。

「あわれ、二羽が二羽共同し一声の悲鳴と共に、田崎の手に首をねじられ、喜助の手に羽根をむしられ、安の手に腹をさかれ腸を引き出されてしまった。夜ふけまで舌なめずりしながら酒を飲んでいる人達の真赤な顔が私には絵草紙で見る鬼の通りに見えた。眠りながらその夜私は思った。あの人たちはどうしてあんなに狐を憎んだのであろう。にわとりを殺したからとて、狐を殺した人々は、それがためにさらにまた、にわとりを二羽まで殺した。」

こういうなぞが、「私」には解けないわけです。つまり、このところで殺された「狐」と、「私」の心の底にあった「母なるもの」とが、ひとつに重なり合っている。私はその母に魅かれています。つづけているわけですね。いったんは、父親の行動を勇ましく思い、喝采を送ったのですけれども、やはり、そこで殺された狐というものに、ある思いを抱き続けている。そして、また、酒盛りのために、にわとりが二羽殺されてしまった、という不条理というものを考え続けている。というところで、物語は終わる。

## 6 狐のもつイメージ

ここで、「狐」のイメージなんですけれども、これは歌舞伎に出てまいります、信太妻の伝説しのだと言うのがあるわけです。これは、平安時代の陰陽師として、呪力を發揮した人として知られている阿部清明という人がいます。この阿部清明が幼いとき、狐に育てられたという伝説があるわけです。芝居では、この阿部清明が、自分を育ててくれた母としての狐を、恋慕うという母恋いの物語になっている。この中に「恋しくば 尋ね来てみよ 尾張なる信太の森のうらみ葛の葉」という歌が出てまいります。ちょうど、これは、謡曲「隅田川」が、母親が子どもを思うという物語だとすると、それとは逆に、子どもが、生みの親を思う、母恋いの物語として信太妻の話というのがある。

荷風が、『狐』を書いたときに、文章の中には出てまいりませんけれども、この信太妻の伝説というのを思い浮かべていただろうと思われまふ。

ところが、この『狐』の話では、そういう狐―母のイメージと重なり合う狐―が、無残に殺されてしまう、そういう伝説を薦口で、一撃の下とどに、打ち殺してしまふ。そういう根を絶ってしまふというのが、近代の世界ということになります。

こう考えてまいりますと、この『狐』という作品は、やはり、江戸から明治へという大きな時代の、その流れの中に浮かべても一度考え直してみる必要があるのではないか、そんな風に思う

わけです。

## (二) 歴史的・文化的に考える―江戸から明治へ―

### 1 二枚の地図を見て

ここで、二番目のモチーフに入っていくわけですが、その前に、ちょっと、荷風の生まれた生家の近辺を、江戸切り絵図と明治の地図で、ちょっと見ていただきたい。

これは、江戸の切り絵図、嘉永年間に出来た切り絵図ですが、「東都小石川絵図」と、こうなっております。(図版①)この南側を江戸川が流れているわけですね。江戸川公園の所から、上水道が、こう分かれているわけでした、これが後楽園を通って水道橋で神田川を渡って、下町一帯に給水する、とこういうことです。

地下鉄が、今は、このあたりを、こう走っています、茗荷谷と後楽園の駅のあいだに金剛寺坂という坂がある。これが、安藤坂という坂で、この安藤坂を下ったあたりが、後楽園です。この周りは、武家屋敷―武家屋敷といっても大名じゃなくて、旗本とか御家人の屋敷―がずっとあった。この武家屋敷の真中に、小石川富坂新町という町屋があります。それから、ここに、金杉水道町という、これも町屋がある。これを、武家屋敷の中に、こういう町人の住んでいる一角がある。金富町というのは、金杉水道の金と富坂町の富を採って金富町と名付けた。いかにも明治らし

図版① 「東都小石川絵図」(嘉永年間)より

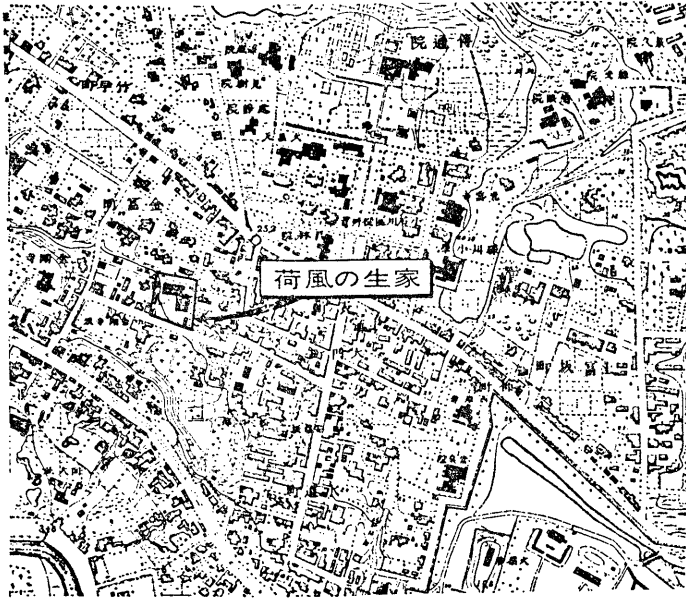


い名前の付け方で大田区なんかと同じ何の由来もない付け方なんです。

荷風の家は、どこにあったかと申しますと、太田平右衛門、遠山彦三郎、後藤勝次郎、この三軒の家がある。これを三軒そっくり買い取り、それを一つの敷地にならして新築したわけだ。明治の初めには、旗本屋敷、あるいは大名家敷を明治政府の官庁や、官員の屋敷にすることは、よくあったことで、内務省の高級官吏だった荷風のお父さんも、同じひそみに習ったわけだ。こういう切り絵図にあったような、御家人の屋敷が官員の屋敷になっていく。これが、江戸から東京という都市のかわり目を示しているということになります。

これが伝通院、今よりよっぽど境内が広い、この通りを春日町から上がってくると、その先が、お茶の水女子大学になる、こんな見当です。

この一角が(図版②参照)これが、お茶大の前の通りで、これが、春日町の方への通りで、これが、神田川。この地図は、明治十九年に作られた五千分の一の東京図というのですが精密な地図ですがこの点線は、水道が暗渠になって、地下を走っているという意味です。今の後楽園の遊園地、後楽園球場等は、だいたい、この周りと考えていただきます。先程の金剛寺坂という曲がった坂のあたり、荷風の家というのは、この所です。この地図には二メートル間隔毎に等高線がある、そうすると、ここに等高線が通っているのが見える。そうすると、先程から申してきました、崖



下の世界というのが、ちょうど、この所にあたるわけです。そして、崖上にこういう具合に家が建っているというのがおわかりだろうと思います。ちょうど、ここに、崖というか、山の手の斜面がある。それが二段になっている。その斜面にそって広がっていたのが、荷風の家の敷地なのです。そして、先程いいました、小石川金富町といえますのはこの所です。

この図では、あまりよくわかりませんが、この近辺は、あまり家が建てこんでいません。一面に桑畑が広がっていたそんな眺めというのがわかると思います。

この家の由来については、『狐』にも、こう書かれていますので。

「旧幕の御家人や旗本の空家敷がここに売り物となっていたのをば、その頃私の父は三軒程をひとまとめに買い占め古びた庭園や木立ちをそのままに広い邸宅を新築した。」

今、スライドで御覧いただいたので、おわかりかと思えます。

後藤勝次郎、太田平右衛門、遠山彦三郎、こういう御家人旗本の屋敷を三軒買い占めた、こういうことだと思えます。

## 2 山の手の荒廃と文明開化

先程説明しましたように、荷風の家の上手には、一面に、畑が広がっております。あるいは、茶畑、桑畑が広がっている。その間に、生け垣で囲まれた宅地が、散在している、こんなところです。台地の上には、伝通院の木立ちがあるという、こんな眺めに



なっていた。こういう眺めというのは、どういふ意味合いがあるかということを考えてみるわけですが、江戸という町は、一つには、水の都―墨田川を中心とする水の都である。それから、山の手の方は、武家屋敷で、たくさんの木立ちがあって、森の都であった。

幕末に日本に來た外人は、江戸という町が、世界でももっとも美しい都市の一つであるということをおぼえております。ちょうど、十九世紀のこの頃といえますと、ヨーロッパのどこの都市も、いわゆる産業革命の煤煙が一面立ちこめているという、そういう都市になっておりましたから、ヨーロッパ人から見ると、江戸というのは、確かに、美しい町であったにちがいない。だいたいが、みんな、炭火で暖をとっているわけですから、煤煙というのが、まったくない。空が大変に澄んでいた。

ところが、明治維新がまいりまして、そこで、幕府が解体する。山の手を占領していた諸大名というのも、国許へ帰ってしまふ。旗本、御家人も、これもまったく屋敷を明け渡さなければならなくなる。明治の初め頃の山の手というのは、実に荒涼とした場所になってしまふ。日本の庭園というのは、ヨーロッパと違って、ちょっと手入れを怠ると、たちまちぼうぼうのやぶになってしまう。せつかくの山の手のすばらしい庭園というのが、本当に、八重葎やむらの生い茂る、木立ちの、うっそうと生い茂る、何か、荒涼とした風景を呈するようになる。先程の地図にも出ていたのですけれども、明治政府では、山の手を、このように空き地にし

ておくのもつたいないということ、桑の木と茶の木を植える。なぜ、桑と茶を植えたかという点、この頃の日本の、輸出品の一番重要な品目が、絹であり茶であった。そういうところからきている一種の殖産興業政策というわけだ。

もう一つ付け加えておくと、薩摩と長州の出身者が、天下を取るわけですが、薩摩にしても、長州にしても、もともと江戸のような都市というのではない。萩にしても、山口にしても、鹿児島にしても、小都市とはいえないけれども、中都市である。そういうところに、生い育った人たちですから、江戸という非常に大きな都市を改造していくというビジョンというものを持ち合わせる事ができなかった。萩にまいりますと今でも、土族屋敷が残っています。行かれた方は御存じかと思いますが、築地の塀がありまして、屋敷内に、みかんが季節にはたわわにみものっている。つまり、ああいう城下町では、屋敷の中を畑にして、例えば、みかんを植えたりすることが、ごく普通のならわしだった。そういう発想を、明治維新になって、今度は、江戸へ持ち込んで、桑や茶を植えたということだろうと思うわけです。そして、一面に桑畑や、茶畑が広がっていた、その間にもう住む者のいなくなった武家屋敷が、荒廃して広がっている。これが、だいたい明治十年代くらいまでの山の手の景観だった。

そういう山の手のすたれた景色というのは夏目漱石の『硝子戸の中』に回想されてあります。漱石が生まれたのは、早稲田のそばなんですけれども、桑畑が広がっていたとか、あるいは、うっ

そうとした木立ちがあつて恐かつた、などということが、『硝子戸の中』に回想されています。漱石の場合には、みなさんも存じの「現代日本の開化」等で、日本の文明開化にいろいろ批判を突き付けておられますけれども、その原体験を探ってみると、やはり、漱石が、そういう荒唐しかけた江戸の一隅で育つたということが、かなり大きな意味を持っているのではないかと思います。それから、詩人の蒲原有明に、こういう回想があるんですけれども、ちょっと読んでみますが、

「明治二十年前の東京は、江戸末期の情緒が頽れながらも、残つてはいたが、維新の際に受けた打撃が、そのままになつていて、一方、文明開化の施設の進展と反映して、到る所に、すさんだ色が著しく目についた、山の手は、ことにそうであつた。旗本かなんぞの広々とした屋敷跡には、桑畑が新たに拓かれていた。実際、その頃の山の手は、草深の田舎であつたといつてよい。下町の女子どもは、狐が出るといつて、泊まりにもこなかつた。」

### 3 象徴としての「狐」と「にわとり」

『狐』という作品の背景には、こういう荒唐した山の手というものがあつた。江戸的世界の残骸が、荷風の生まれた家にも残つていた、そんな風に考えます。つまり、先程、『狐』の「私」の家というのは、崖上の世界と、崖下の世界の二つに、切り分けられると申しましたけれども、崖上の世界の方は、まさに、文明開

化の世界、崖下の世界の方は、いわば、江戸的な世界ということになるわけです。そして、その江戸的な世界を象徴する精霊として登場するのが、キツネというわけです。

狐というのは、様々な伝承とか、迷信に包まれているのですけれども、この荷風の『狐』の中でも、一家の女性は、狐にまつわる様々な伝承というものを信じている。ところが、男の方は、それを振り捨てようとしている、ということが、はっきりと書き分けられている。

「日頃田崎と仲の良いくない、御飯焚きのお悦は、田舎出の迷信家で、顔の色まで変えて、お狐様を殺すのは、お家のため不吉であることを説いた。すると田崎は、主命の尊き、御飯焚き風情の嘴を入れるところでない、一言の下に排斥してしまつた。お悦は、真赤なほほをふくらまし、乳母も共々私に向かつて、狐つきや狐のたたり、また狐の人をばかすこと、伝通院裏の沢蔵稲荷の靈験なぞ、こまごまと話して聞かせた。私は、その頃よく人の言うこつくり様の占いなぞ思い合わせ、半は田崎の勇に組して、一緒に狐退治に行きたいようにも思い、半は世にそういう不思議もあるのかしらと疑いもしたのであつた。」

そんな風書いてあります。

この狐というのは、江戸時代には、どういうイメージをもつていたのか、これは、稲荷信仰と結びつくわけですけれども、山の手の下級武士の家では立身出世を祈願するためにキツネを屋敷の中にまつる。そういう屋敷神がたくさん作られていた。それが

ら、江戸時代には、よく女性が狐つきになるわけですが、その狐つきが落ちるとそのお札に狐を祭る、そんな稲荷もたくさん作られていた。江戸という町の特徴としてよく言われるんですけども、「伊勢屋、稲荷、犬の糞」というコトワザがある。伊勢屋というのは、伊勢出身の商人が非常に多かったということ。それから露路裏などで、犬がたくさん飼われていた。それから、稲荷がどこでもあったということなんです。

けれども、そういう場合に、お稲荷というのは、小地域の中心として、ある意味をなう聖地であった。ところが、そういうお稲荷の立っている意味、あるいは、狐の持っている意味というのが文明開化の時代になって、だんだんとうすめられていく。そういう時期が、荷風の『狐』の物語の背景にあったらうと思われまます。それから、山の手と下町の境にたくさん稲荷があったというところが、言われています。境というのは、いろいろありますが、いい場所という風に考えられるのですが、例えば、橋であるとか、坂であるとか、十字路であるとか、そういう所に道祖神とか庚申塚とか、あるいは、お地藏様が置かれる。これは、普通、サエの神——境界を表わす神という風に言われておりますが——お稲荷もそういう意味合いがあった。

荷風の家の場合も考えてみますと、先程、地図でご覧になったように、山の手と下町の境界面にあるということ、そういう所に、狐が現れる、そんな風に読み取ったらいいのではないかと思っています。

ところが、狐の持っていた霊力・呪力というのは、文明開化の世界では、色あせてくる。一方では先程申しましたように、『狐』の「私」の家では、にわとりが飼われているというわけです。にわとりというのは、卵を生み、肉を食べる大変有益な家畜である。文明開化の世界の動物なんです。ところが、狐というのは、怪しげな伝承がまといついている。何の役にも立たない実にあいまいな動物で、これが江戸の世界を代表して現われている、こういうことだろうと思います。

『狐』の中の私の家というのは、崖上の家、それから崖下のおどろおどろしい世界。崖上で飼われているにわとり、それから崖下の世界に現れる狐、そういう風に、文明開化の空間と江戸的空間というのが、実にきちんと切り分けられている、こういうことであるわけです。

それで、にわとりを飼うというのは、江戸時代からあったのですけれども、本格的な養鶏というのが始まったのは、近代に入ってから、明治十年代になりました、レグホンだとか、コーチンだとか、僕等が知っておりますにわたりの西洋品種が輸入されました、そして舶来のにわたりの飼育というのが盛んになってまいります。こういう風に考えてまいりますと、『狐』の「私」の家で飼われていたにわとりというのは、この頃、明治政府が推進していた殖産興業政策のミニチュアになっている。こう考えてもいいんだろうと思うのです。

そして、また、荷風のお父さん、永井久一郎という人ですけれど

ども、この人は、内務省衛生局に勤めていた。内務省というのは、大久保利通が作った官庁であるわけですから、でも殖産興業政策を一番重点的に推進したのが、内務省である。内務省衛生局の高級官僚であった荷風のお父さんは、この頃、チェンバールの百科全書というのを翻訳しているわけなんです。この百科全書は文部省の蔵版ですが、その中で、荷風のお父さんが訳したのは、「豚・兎・食用鳥・籠鳥編」というものです。

#### 4 荷風と文明開化

初めの方で、狐狩りというのは、崖下の世界にわだかまっていた。いわば、母なるものの原像を殺りくする祝祭劇だと申しました。しかし、もう一つ歴史的な文脈というものも被せてみると、『狐』という世界は、文明開化の実利的な世界、あるいは、合理的な世界というものが、江戸的な世界の中に、蓄えられていたおどろおどろしい、伝承というものを、いわば、抹殺してしまう。そういうドラマである、こんな風に考えていたきたい。そして、また「私」の父親に与えられていた役割というのは、混沌とした崖下の世界に秩序をもたらし、もっと了解し易い世界に変えることだった。その一方、幼い「私」というのは、母親の柔い袖の陰に隠れる、そして、父親の振舞に、ある憎しみを持ち続けるわけですけれども、荷風という人物は、文明開化的な世界、その男性的な世界というものを嫌ひまして、それとは別な、江戸的な世界に帰っていきこうとした人だった。そこに女性的なるものを

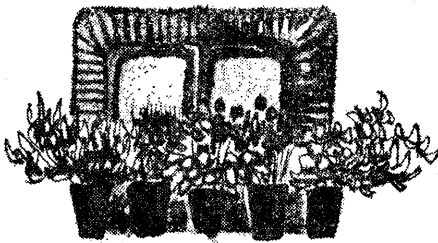
求めようとした人だった。そういう荷風というものの原像が、この『狐』という作品に、はつきり現れているのではないか、そういう奥行きを持った作品として、『狐』という作品を読んでみたいと思います。

||了||

(立教大学)

[記録・仲 明子]

(引用の文章は新漢字・現代かなづかいにしました。)



〔史料紹介〕

『邦訳 日葡辞書』③

M・M・M

—わが国中世の児童文化史研究によせて—

C字で始まる語

(承前)

カタコマニノスル (肩駒に乗する)

人を、両脚を開かせて肩の上に乗せる。

カツケ (かつけ)

乳母、あるいは、幼児を養育する婦人。

カツケ、クル (かつけ、くる)

馴らす、または、飼い馴らす。

カワイガリ、ル、ツタ (かわいがり、る、った)

カワイイから転成した語。不憫に思う、あるいは、いつく

しみ愛する心を抱く。

カハイイ (かはいい)

同情、憐憫の情を催させる (もの)、あるいは、同情の念

を抱く (こと)。

カワラケ (かはらけ)

脾臓の病気などのような子供の病気。

チバナ (茅花)

子どもが食べる白い芯のある、或る種の草。

チブサ (乳房)

婦人の乳房。

(例) チブサヲ フクム (乳房を含む) 乳を飲む、あるいは、口に乳房をくわえる。

(例) チブサヲ フクムル (乳房を含む) 「乳児の」口の中に乳房をさし入れる、あるいは、乳を飲ませる。

チッコ (ちっこ)

(例) チッコト シタル ワランベ (ちっことしたる童部) 「表立たないで」身をひそめてはいるけれども、人となりは快活ではきはきしている子ども。

チチ (父)

父親。

チチハワ (父母)

父と母と。

チチゴ (父親)

父。婦人語。

チチヲヤ (父親)

父親。

チクバ (竹馬)

タケウマ (竹馬) 子どもの使う竹製の馬。

チクビ (乳首)

乳房の先端。

(例) チクビヲ フクムル (乳首を含む) 乳房の先端を人の口の中にさし入れる、すなわち、乳を吸わせる。

(例) チクビヲ フクム、クワユル (乳首を含む、または、銜ゆる) 乳房を口に含む、または、乳を飲む。

チゴ (児)

まだ頭髮を伸ばして「剃らないで」いて、寺院で勉強する子供。

チグチタハ (乳朽ちた歯)

乳のために黒くなった乳飲み子の歯。

チグチテ、チグチタ (乳朽ちて、または、乳朽ちた)

欠如動詞。幼児の歯が乳のために黒くなる。

チイサイ (小さい)

小さい (もの)。

チモ (知母)

ある葉。

チノミチ (血の道)

血が頭に上ることから起こる婦人の病気。

チノミゴ (乳呑児)

乳児。

チラウ (乳癆)

婦人の乳房にできる腫物。

チヲトトイ、チヲトト (乳兄弟、または乳おとと)

乳兄弟。すなわち、乳の上での兄弟。

チヨウシ (長子)

ソウリヤウゴ (惣領子) 長男。

カウ (孝)

父や母に対して、子が従順であること。

コ (子)

子ども。

(例) コヲ モウクル (子を儲くる) 子どもをもつ。

(例) コヲ ナガス (子を流す) 胎内でまだ十分に固まら

ない胎児をおろす [墮胎する]。

(例) コヲ ダク (子を抱く) 子どもを膝に抱く。<sup>1)</sup>

1) 日西辞書、日仏辞書では、「子どもを首からつるして

胸に抱く」

コアシ (小足)

小さな歩幅。

(例) コアシニ アユム (小足に歩む) 狭い歩幅で歩む。

コバイイ (子早い)

頻繁に、あるいは、造作もなく子を孕んだり産んだりする

(女)。

コビ (こび)

子どもが小石を使ってする勝負事の一つ。

コバウシ (小法師)

小さい坊主、剃髪している子ども。

1) コボウシの誤りであろう。

カウカウ (孝行)

(いつくしみ) 子が親に対して従順なこと。

ココ (ここ)

幼児の糞便 [はば]。

コダネ (子種)

子を産む種。

コドク (孤独)

ミナシゴ、ヒトリミ (孤子、独身) 孤児と、庇護する者も

ないよるべない人。

コドモ (子ども) ↓ ヒトハラ、ボッカ

コウヘイ (こうへい)

子どもでありながら、子どもに相当した以上の知識があり、年齢的にもまかせていることを示すような行状や動作。

(例) コウヘイヲ イフ (こうへいを言ふ) 子どもであり

ながら、その年齢相当の知識以上のことを語る、あるいは、言う。また、ある事を勝手気ままに言う、または、常軌を逸した言い方をする。

コウヘイナ (こうへいな)

右と同じような事を言ったりする (者)。

コウガク (後学)

ノチノ マナビ (後の学び) 将来のための勉強、あるいは、学問。

コガイ (子飼・蚕飼)

鳥や獣などを小さなうちから育てること。また、蚕を飼うこと。

また、比喻。幼児のころから人を養育すること。

コギイタ (胡鬼板)

女の子が、ある堅い木の実を空中に打ち上げて遊ぶのに使う小さな板 (羽子板)。

コキノ コ (胡鬼の子)

子どもが遊びに使うために、鳥の羽根をさし込んだある堅い木の実。

コウイン (勾引)

ヒトカドイ (人かどひ) 人を呼び寄せて、だましたり、さ

らったりして連れて行くこと。

カウジュン (孝順)

孝行の順ひ。子の親に対する、または、弟子の師匠に対する従順。

コマ (独楽)

コマ

コモチ (子持ち)

子どもを育てる女、または、子どものある女。

コノカミ (兄)

兄

コンテイ (昆弟)

兄と弟と。

コッペイ (こっぺい)

コウヘイに同じ。

(例) コッペイナモノ (こっぺいな者) 年齢相当以上の知識をひけらかす者、または、適当な度合をこえて自由気ままな者。

コサクナ (こさくな)

年かさの大人のように振舞う子どもについて言う。

コツボ (子壺)



母の腹の中の、胎児が入っている所。

コワラウ (小童)

人に仕えて、草履取りなどの卑しい役目を勤める年少の子ども。

コウマセ (子生ませ)

助産婦。

カウシ (孝子)

孝行な子。

コシノバウ (小師の坊)

復習して教える人、すなわち、師匠が読んだところや教えたとおころを、相弟子のために繰り返して復習してやる者。

カウヤウ (孝養)

(例) ブモヲ カウヤウ スル (父母を孝養する) 子とし

ての愛情をもって父や母を扶養する。

コユイノエボン (小結ひの烏帽子)

子どもが着用する、烏帽子の一種。

コゾイ (子添)

助産婦。

ククメ、ムル、メタ (衝・咄め、むる、めた)

幼児や小鳥などの口の中に、食物を入れてやって食わせる。

クジ (くじ)

天然痘。

(例) クジヲ スル (くじをする) 天然痘にかかる。

九州地方の語。ハウサウ (疱疹)、あるいは、モガサ (もがさ) と言う方がまざる。

なお、近畿地方では、民衆はまたオトナ (大人) とも言う。

(例) オトナゴトヲ スル (大人事をする) 天然痘にかか

る。

クウケン (空拳)

(空しい拳) いかにも何かを与えそうな様子に見せかけて、子どもの前にさし出す握りこぶし。

クサ (くさ)

(例) クサヲ フルフ (くさを震ふ) 婦人が或る草を使っ

て墮胎する。

クツシャメ (くつしゃめ)

子どもがくしゃみをする事。

「花を愛するよう」に」という題で、周郷博士の書かれた文章に（このかなしき幼児教育、チャイルド社）、インドの詩人であり哲学者であるタゴールが、大正五年にはじめて神戸の港に上陸したときの印象記が引用してある。それは「日本の旅」の一節で、次のように述べられている。

「なお一つの光景が、私を非常に幸福にさせた。それは日本の子どもである。こんなに大勢の子どもが、いたるところの路上にあそんでいるのを、どこの国へいっても見たことがない。日本人は花を愛するようにまた子どもを愛しているからだと思った。子どもを愛するには、少しも上べのかざりはいらぬ。ただ私無く偏頗なくして、彼らに花のように愛することができればよいのである。」

私は、この美しい文章を何度も読み返した。そして、いまの子どものたち状態を考えた。路上に遊ぶ子どもの姿

は、めったに見られない。大きなかばんをかかえて学習塾や体育教室に行く子どもをバスの中に見かけても、花のように遊んでいる子どもの姿を見ることはない。幼稚園でも、保育園でも、子どもたちは遊ぶことができないでいる。タゴールの文章から考えれば、それはおとなが、「私無く偏頗なく」子どもを「花のように愛する」心を見失った証拠である。その心はだれでも内心をさぐればあつるのだから、社会の現実の大きな力に押流され、将来への不安や人の心の欲深さによって見えなくなってしまう。

ひたすらに、いまを楽しんで生きる子どもたちを見ると、私共は幸福な気持ちにさせられる。それを具体的につくり出すのは保育者の力である。それに原動力を与えるのは、幼児期の素朴な心、人間の成長の中に位置づける人間観と教育観である。

(津守 真)

## 幼児の教育 第八十巻 第六号

六月号 © 定価二七〇円

昭和五十六年五月二十五日 印刷  
昭和五十六年六月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津守 真  
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

110 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

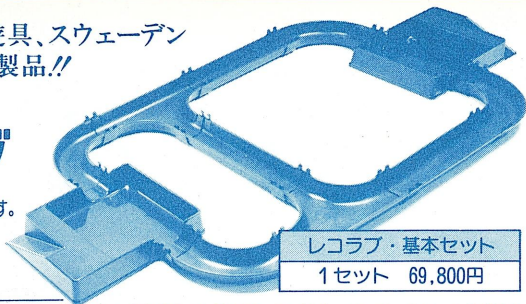
振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所 フレーベル館にお願いいたします

砂場遊び、水遊び遊具、スウェーデン  
生まれの画期的新製品!!

# レコラブ

- レコラブの組み立ては簡単です。
- 丈夫で長持ちします。  
プラスチック製。
- 戸外での遊びに最適です。



レコラブ・基本セット
1セット 69,800円

- ダム 16,500円
  - 水路止め(2個) 2,700円
  - すいしゃセット 1セット 6,600円
- 水路や港を段差をつけて置き、その間をダムでつなぎます。水門の開閉により水を流したり貯えたりして、水位の変化が観察できます。
- 水路止めを使用することによって、水路のさまざまな組み合わせが可能になり、遊びがさらに発展します。
- くるくる回すと簡単に水流を起こせます。取り付け、取りはずしも簡単です。水に浮かべて遊ぶ船や魚などもセットされています。

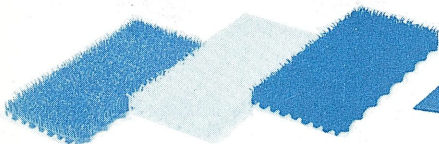
基本セットのパーツ分売も可。スペースや遊び方に合わせてお選び下さい。

人工芝 (A)	緑 80ピース入	31,200円
	赤 18ピース入	7,000円
	黄 18ピース入	7,000円

人工芝 (B)	69,000円
---------	---------

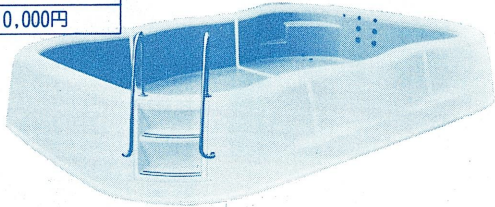
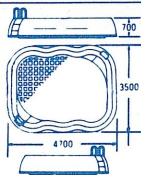
- ロール 幅1m×長さ10m 厚さ8mm  
塩化ビニリデン

- ユニット式 1ピース厚さ3cm EVA樹脂  
ユニット式なので形や大きさなどを自由にかえられます。



FRP大型プール KP-50型	
循環ポンプなし	1,263,000円
循環ポンプ付	1,410,000円

- FRP (強化プラスチック)  
水位3段切替 (30cm・45cm・60cm)



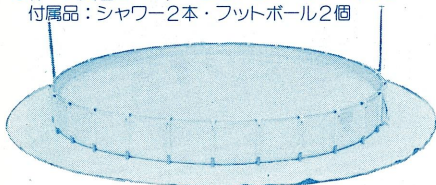
大型プール	190,000円
-------	----------

- 枠: 硬質塩ビパイプ 生地: ビニールターポリン  
付属品: シャワー2本・フットボール2個

- グランドシート (大型プール用)  
55,000円  
●直径4.8m

- フタ (大型プール用)  
40,500円  
●直径3.9mビニールターポリン製

- 格納袋 (大型プール用)  
26,500円 ビニロン帆布製  
●幅70cm 長さ100cm 高さ35cm



水遊びをより楽しくするフレールベル館製おもちゃ

くわしくは、フレールベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレールベル館



キンダーブック®

# なつのおともだち

楽しい夏休み!!

お母さんと一緒に、のびのび  
定価 各250円  
A4判ワイド



## ①年少用

●付録「なつのせいかつ」(生活表) B4判二つ折  
「せいかつシール」 B6判  
「こんちゅうカード」



## ②年中用

●付録「なつのせいかつ」(生活表) B5判16頁  
「せいかつシール」 B5判  
「こんちゅうカード」

## ③年長用

●付録「なつのせいかつ」(生活表) B5判16頁  
「せいかつシール」 B5判  
「こんちゅうカード」



くわしくは、フレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

### フレーベル館